山口県埋蔵文化財センター調査報告　第91集

中恋路遺跡 3

（なかこいじいせき）

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、山口市宮野下中恋路での一般県道宮野上山口停車場線の道路改良工事に先立ち、山口県防府土木建築事務所から委託を受けて、同地内に所在する中恋路遺跡において、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図りながら記録保存をすることとしております。

山口県埋蔵文化財センターでは、平成23年度に中恋路遺跡の第1期調査を、平成25年度に第2期調査を行っています。これまでの調査では、弥生時代から室町時代にかけての幅広い年代の貴重な遺物や遺構が発見されています。

第3期となる今年度は、昨年度までの調査区を含む道路(一般県道宮野上山口停車場線)の延長線上に計画されている路線内の継続調査を実施し、過去の人々の生活文化や社会を知るうえで、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。奈良時代から室町時代にかけての集落に関係する遺構が数多く検出され、縄文時代から室町時代のものまで幅広い年代の遺物が出土しました。こうしたことから、この地域は太古より生活の地として大変適した所であったことがうかがえます。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通し、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に対する愛着をさらにもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人山口県ひとづくり財団
理事長　松永　貞昭

例 言

1　本書は、平成26年度に実施した中恋路遺跡(山口県山口市宮野下地内)の発掘調査報告書である。

2　調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託〔契約名：一般県道宮野上山口停車場線道路改良(総合交付金)工事に伴う調査業務委託第１工区〕を受けて実施した。

3　調査組織は、次のとおりである。

調査主体　公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

調査担当　文化財専門員　　高　木　英　明

文化財専門員　　井　上　広　之

調　査　員　　河　村　美　沙

4　本書の第１図は、山口県防府土木建築事務所提供の地図を元に作成した。第２図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「山口」「仁保」を複製使用した。

5　本書で使用した方位は国土座標(世界測地系)の北、標高は海抜高度(m)で示している。

6　本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版標準土色帖』Ｍｕｎｓｅｌｌ方式による。

7　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

8　出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。

9　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＩ：竪穴建物　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＡ：柵列　　ＳＤ：溝

ＳＫ：土坑　　ＳＴ：墓　　ＳＰ：柱穴　　ＳＸ：性格不明遺構

10　報告書作成の過程で、緑釉陶器の鑑定については杉原和恵氏・佐々木達也氏(防府市教育委員会)、磁器の鑑定については徳留大輔氏・市来真澄氏(山口県立萩美術館・浦上記念館)、石器・石製品の鑑定については亀谷敦氏(山口県立山口博物館)にご教示・ご協力をいただいた。

11　資料の分析・鑑定に関して、リン酸・カルシウム分析並びに放射性炭素年代測定(ＡＭＳ測定)を業者に委託し、その成果を第Ⅳ章に掲載した。

12　本書の作成・執筆は、高木・井上・河村が共同で行い、編集は高木が行った。

本文目次

Ⅰ　調査の経緯と概要 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の成果 …… 5
　1　遺構 …… 5
　2　遺物 …… 28
Ⅳ　中恋路遺跡発掘調査に係る自然科学分析業務 …… 57
　1　ＳＴ２・ＳＴ４遺構のリン酸・カルシウム分析 …… 57
　2　ＳＫ27遺構の放射性炭素年代測定 …… 59
Ⅴ　総括 …… 61

挿図目次

第１図　調査区設定図 …… 1
第２図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 3
第３図　検出遺構実測図（１） …… 5
第４図　検出遺構実測図（２） …… 6
第５図　検出遺構実測図（３） …… 7
第６図　検出遺構実測図（４） …… 9
第７図　検出遺構実測図（５） …… 10
第８図　検出遺構実測図（６） …… 11
第９図　検出遺構実測図（７） …… 12
第10図　検出遺構実測図（８） …… 13
第11図　検出遺構実測図（９） …… 15
第12図　検出遺構実測図（10） …… 16
第13図　検出遺構実測図（11） …… 17
第14図　検出遺構実測図（12） …… 18
第15図　検出遺構実測図（13） …… 20
第16図　検出遺構実測図（14） …… 21
第17図　検出遺構実測図（15） …… 22
第18図　検出遺構実測図（16） …… 23
第19図　検出遺構実測図（17） …… 24
第20図　検出遺構実測図（18） …… 25
第21図　検出遺構実測図（19） …… 26
第22図　出土遺物実測図（１） …… 28
第23図　出土遺物実測図（２） …… 29
第24図　出土遺物実測図（３） …… 31
第25図　出土遺物実測図（４） …… 32
第26図　出土遺物実測図（５） …… 33
第27図　出土遺物実測図（６） …… 34
第28図　出土遺物実測図（７） …… 35
第29図　出土遺物実測図（８） …… 37
第30図　出土遺物実測図（９） …… 38
第31図　出土遺物実測図（10） …… 39
第32図　出土遺物実測図（11） …… 40
第33図　出土遺物実測図（12） …… 41
第34図　出土遺物実測図（13） …… 43
第35図　出土遺物実測図（14） …… 44
第36図　出土遺物実測図（15） …… 45
第37図　出土遺物実測図（16） …… 46
第38図　リン酸・カルシウム分析結果 …… 58
第39図　暦年較正結果 …… 60

表目次

第１表　掘立柱建物一覧表 …… 27
第２表　出土土器・土製品観察一覧表 …… 48
第３表　出土石製品観察一覧表 …… 56
第４表　出土金属製品観察一覧表 …… 56
第５表　リン酸・カルシウム分析結果 …… 58
第６表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果 …… 60
第７表　中恋路遺跡検出主要遺構数一覧表 …… 61
第８表　山口県内遺跡の鏡が出土した古代・中世の主な土坑墓、木棺墓 …… 62

図版目次

図版１　調査区遠景（北東から）
図版２　調査区全景
（平成 25・26 年度調査範囲合成写真）
図版３　調査区近景
（平成 26 年度調査範囲　南西から）
ＳＩ１完掘状況（東から）
図版４　ＳＩ２完掘状況（南から）
ＳＩ３・ＳＫ79・ＳＫ95・ＳＫ96・
ＳＫ99・ＳＸ８完掘状況（南東から）
図版５　掘立柱建物群①
（平成 25・26 年度調査範囲合成写真）
図版６　掘立柱建物群②
図版７　ＳＢ35 完掘状況（東から）
ＳＢ36 完掘状況（東から）
図版８　ＳＰ547（ＳＢ18）遺物出土状況（北から）
ＳＰ551（ＳＢ19）遺物出土状況（南から）
ＳＰ144 遺物出土状況（東から）
ＳＰ174 遺物出土状況（東から）
ＳＰ202 遺物出土状況（南から）
ＳＰ426 遺物出土状況（北から）
ＳＰ684 遺物出土状況（北から）
ＳＰ984 遺物出土状況（南から）
図版９　ＳＰ1108　遺物出土状況（南から）
ＳＰ1110 遺物出土状況（北から）
ＳＰ1261 遺物出土状況（南から）
ＳＰ1310 遺物出土状況（南から）
ＳＰ1314 遺物出土状況（南から）
ＳＫ４　土層断面（南東から）
ＳＫ８　遺物出土状況（南東から）
ＳＫ12 遺物出土状況（南から）
図版10　ＳＫ23 遺物出土状況（東から）
ＳＫ36 遺物出土状況（北東から）
図版11　ＳＫ41 遺物出土状況（東から）
ＳＫ27 遺物出土状況（北から）
ＳＫ46 土層断面（東から）
ＳＫ61 土層断面（西から）
ＳＫ101 土層断面（西から）
図版12　ＳＫ101 完掘状況（北から）
ＳＤ１完掘状況（北東から）
ＳＤ13 完掘状況（南東から）
図版13　ＳＴ１遺物出土状況（南東から）
ＳＴ２遺物出土状況（南から）
図版14　ＳＴ３遺物出土状況（東から）
ＳＴ４遺物出土状況（東から）
図版15　出土遺物（１）
図版16　出土遺物（２）
図版17　出土遺物（３）
図版18　出土遺物（４）
図版19　出土遺物（５）
図版20　出土遺物（６）
図版21　出土遺物（７）
図版22　出土遺物（８）
図版23　出土遺物（９）
図版24　出土遺物（10）
図版25　出土遺物（11）
図版26　出土遺物（12）
図版27　出土遺物（13）
図版28　出土遺物（14）
図版29　出土遺物（15）
図版30　出土遺物（16）
図版31　出土遺物（17）
図版32　出土遺物（18）
図版33　出土遺物（19）
図版34　出土遺物（20）

Ⅰ　調査の経緯と概要

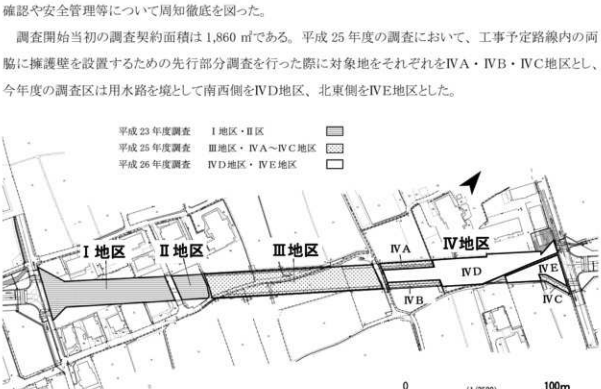
一般県道宮野上山口停車場線単独道路改良事業に伴い、山口県山口土木建築事務所(当時)から、路線予定地内の埋蔵文化財の有無についての照会があり、山口県教育委員会は平成21年11月に対象地の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、柱穴等の遺構が密集して分布する状況が確認され、山口県教育委員会は本調査が必要である旨を回答した。この結果を受け、山口県防府土木建築事務所(平成22年度より山口県山口土木建築事務所と統合)は財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター(当時)に発掘調査を委託し、平成23・25年度に業務を実施した。この調査結果については、すでに『中恋路遺跡』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第80集)、『中恋路遺跡2』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第87集)として刊行されている。

こうした状況下、山口県教育委員会と山口県防府土木建築事務所の協議により、平成25年度に調査したⅢ地区の北東側の発掘調査を引き続き実施することとなり、山口県防府土木建築事務所から委託を受けて公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが、記録保存を図るための発掘調査を行うこととなった。

現地調査を始めるに当たり、調査対象地区の現況確認や関連資料調査等を行いながら山口県防府土木建築事務所との打ち合わせを進め、さらに近隣の小・中学校、警察署、自治会等に調査期間中における安全確保のための理解と協力を要請した。その後、4月22日に発掘作業員説明会を開催し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。

調査開始当初の調査契約面積は1,860㎡である。平成25年度の調査において、工事予定路線内の両脇に擁護壁を設置するための先行部分調査を行った際に対象地をそれぞれをⅣA・ⅣB・ⅣC地区とし、今年度の調査区は用水路を境として南西側をⅣD地区、北東側をⅣE地区とした。



第1図　調査区設定図

5月 14 日には調査事務所を設置し、翌々日から重機を用いた表土除去を開始して、順次発掘作業員による本格的な遺構検出作業に入った。当初は、調査区内のアパート駐車場の部分撤去が秋前後になる予定だったため、調査が2期に分かれる可能性もあったが、アパート所有者との協議が順調に進み、6月初旬には路線予定地内のアスファルト部分と盛り土を撤去することができた。

一方、調査の進行と併行して、山口県防府土木建築事務所と山口県教育委員会は調査対象範囲の変更について協議し、アパート駐車場の路線予定地に沿った 1.50 m幅分を新たに調査地とすることを決め、調査面積は最終的には 1,910 ㎡となった。

調査区は比較的水はけのよい土地柄のため、梅雨時期も作業進行への影響は少なかったが、遺構検出作業が進むにつれ、遺構の数と規模が当初の予想をはるかに上回ることが判明した。そのため、発掘作業員の増員並びに空中写真撮影を2回行うことを決定し、7月後半から遺構の掘り込みを開始した。また、掘り込み作業と併行して個別図面の作成や写真撮影を行い、遺構の記録化を進めた。

重機による表土除去

遺構の掘り込み

現地説明会

9月 10 日には1回目の空中写真撮影を実施し、その後グリッド実測と併行して、後半部分の掘り込みに入った。調査区中央部は特に遺構が密集しており、遺構の先後関係も複雑であったため作業は難航したが、適宜発掘作業員を増員することによって掘り込みを進め、11 月 15 日には2回目の空中写真撮影を実施することができた。

9月 19 日には山口市立平川中学校の2年生3人、10 月 29 日には山口県立光丘高校の1年生1人の職場体験学習を受け入れ、遺跡見学と発掘体験を行った。どの生徒も当遺跡の発掘に興味・関心を持ち、厳しい暑さの中真剣に作業に取り組んでいた。

11 月 22 日には、それまでの調査で得られた成果を公開する目的で、現地説明会を開催した。地元住民を中心として約 80 人の参加があり、盛会のうちに終了することができた。

11 月 28 日をもって、調査区後半部分のグリッド実測、個別図面の最終確認を終え、12 月3日には重機による埋め戻し並びに調査事務所等の撤去を完了し、6か月半におよぶ現地調査を無事終了した。

現地作業終了後は、昨年度の先行調査地であるⅣA～ⅣC地区の調査成果も含めた記録類の整理に本格的に着手した。併せて出土遺物の実測図作成、写真撮影、写真図版作成及び原稿執筆等の作業を続け、この報告書を刊行するに至った。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

中恋路遺跡は、山口県山口市宮野下中恋路に所在する。宮野地区は山口盆地の北東部に位置し、北側は山陰側・瀬戸内側との分水界である標高 700m 前後の鳳翩山地において萩市と接している。北・南・東部の3方には 100 ～ 250 mの山地・丘陵がそびえ、西はゆるやかな平地となる。盆地の中央には椹野川が流れ、右岸地域には北部の荒谷川流域に形成された扇状地が、左岸地域には谷底平野が広がる。河川流域の平地を利用した農業が主流であるが、近年は郊外の住宅地として宅地開発や道路建設も頻繁に行われている。盆地特有の気候で寒暖差が激しく、冬季は「鳳翩颪」と呼ばれる北西からの季節風が吹く。本遺跡は椹野川とその支流である古平川に挟まれた地点に位置する。

遺跡名の「恋路」という地名は、『風土注進案』に「越道ノ里　今戀路卜作リ」とあることから、元は峠に通じる地という意味であった名が転化したものだと考えられ、古くから交通の要衝であったことがうかがえる。

宮野地区には、縄文時代より人々が生活していたことがわかっている。屋敷遺跡から縄文時代前期・後期の縄文土器片がまとまって出土し、宮の前遺跡からも竪穴建物のほか柱穴・土坑・溝が検出されたほか、後晩期の縄文土器が出土した。これらの遺跡は主に椹野川右岸地域の扇状地や丘陵裾に集中していることから、人々の生活基盤がこの地にあったことがうかがえる。なお、昨年度の本遺跡の調査において縄文土器が出土しているため、左岸地域も人々の活動の場であった可能性がある。

弥生～古墳時代になると、椹野川流域の盆地縁辺の尾根上に多くの墳墓が築造されるようになった。特に右岸地域の丘陵上に位置する上の山古墳群においては、弥生時代後期終末と推定される方形台状墓か

1 中恋路遺跡　2 新城河内遺跡　3 古寺遺跡　4 熊坂遺跡　5 下岡遺跡　6 宮野岡の原遺跡　7 岡原古墳　8 宮の前遺跡　9 殿山古墳　10 上恋路古墳　11 桜畠遺跡　12 上の山古墳群　13 竜河内遺跡　14 平野古墳　15 竹の花遺跡　16 三の宮古墳　17 初瀬遺跡　18 江良遺跡　19 屋敷遺跡　20 大道寺遺跡　21 七尾山城跡　22 八幡窯跡　23 大内氏関連町並遺跡

第２図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

ら3基の箱式石棺が出土した。副葬品として小型鍛造鉄刀などの鉄器・鼓形器台・高杯が出土しており、弥生時代終末期から古墳時代への移行期の様相を呈している。古墳時代には、殿山古墳・平野古墳などが右岸の丘陵裾に築造されている。平成14(2002)年度に山口市教育委員会が実施した本遺跡の発掘調査で、後期の竪穴建物が8棟、掘立柱建物が5棟検出され、以後徐々に集落の様相も明らかになってきている。

古代以降の宮野地区の歴史においては、仁壁神社が中心的役割を果たしている。当神社は嘉祥4(851)年に正六位上の位階を与えられたとされる古社である。位田を与えられたことで国から経済的保護を受けられたこと、さらに『延喜式神名帳』中「周防国十座」においても吉敷郡で唯一名を挙げられていることから、古代から信仰を集めた神社であったことがうかがえ、当時の宮野地区は仁壁神社を中心に賑わいをみせていたと考えられる。

平安時代の状況を反映した建久6(1195)年の『東大寺領宮野庄田畠等立券文』から、当時の宮野地区は公地で、条里制が施行されていたことがわかる。

中世になると、この地は東大寺大仏修理を担った宋人陳和卿の給領地になった。よって、これまで公地であった宮野地区は荘園へと性格を変え、宮野庄という呼称に変わった。建久6(1195)年、東大寺大仏殿が竣工すると、陳和卿は宮野庄を東大寺に寄進したため、以後宮野地区は東大寺領となった。鎌倉時代後期になると、宮野庄は周防国内の他の国衙領と同様、大内氏およびその重臣たちに横領・私領化され、それまで強かった東大寺との関係もやがて途絶えていった。大内氏は海外貿易や鉱山開発などの収益による財力を背景に、約200年にわたって絶大な権力を握った。当該期の宮野地区の遺跡・出土遺物として、庵河内遺跡・宮の前遺跡・新城河内遺跡から大内氏時代の対外貿易を示す天目茶碗・青磁・白磁などが、初瀬遺跡から京都系土師器皿が出土している。中世の集落遺跡としては、椹野川右岸地域においては前述の庵河内遺跡、宮の前遺跡のほか、江良遺跡、桜畠遺跡があげられる。中でも桜畠遺跡では溝によって方形に区画された掘立柱建物群が確認され、当時の集落構造を知るうえで重要な資料となっている。また左岸地域でも開拓に伴い集落が形成されていったと考えられ、昨年度までの本遺跡の調査で14～15世紀の掘立柱建物が、近接する新城河内遺跡においても14世紀の掘立柱建物が確認されている。

天文19(1550)年、大内氏は重臣陶晴賢の謀反により実質的に滅亡した。その後、陶氏は安芸の毛利元就・石見の吉見正頼に討たれ、周防・長門両国は毛利氏の分国となった。慶長5(1600)年、毛利氏が萩に移封したことで、以後250年あまり宮野地区は萩藩に統治されることとなる。

藩政時代には、宮野庄は宮野村と呼ばれ、山口宰判に属していた。明治時代になると宮野上村・宮野下村に分かれたが、後の市町村制実施により宮野村となった。昭和16年、宮野村は山口市と合併し現在に至っている。

引用・参考文献編

山口県文書館 1960『防長風土注進案』第12巻 山口宰判 上
田村哲夫編 1981『宮野八百年史』 宮野八百年史刊行会
山口市史編集委員会編 1982『山口市史』山口市
建設省山口工事事務所・山口県教育委員会編 1990『屋敷遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第126集
建設省山口工事事務所・山口県教育委員会編 1991『桜畠遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第133集
山口県教育委員会編 1994『庵河内遺跡　上の山古墳群』 山口県埋蔵文化財調査報告第164集
山口市教育委員会編 1995『初瀬遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第51集
山口市教育委員会編 1995『宮の前遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第53集
山口市教育委員会編 1996『山口市内遺跡詳細分布調査(宮野地区)』山口市埋蔵文化財調査報告第59集
山口市教育委員会編 2002『8　新城河内遺跡　第1次調査』『山口市埋蔵文化財年報1―平成12(2000)年度―』
山口市教育委員会編 2002「11　中恵路遺跡　第2次調査」『山口市埋蔵文化財年報3―平成14(2002)年度―』

Ⅲ 調査の成果

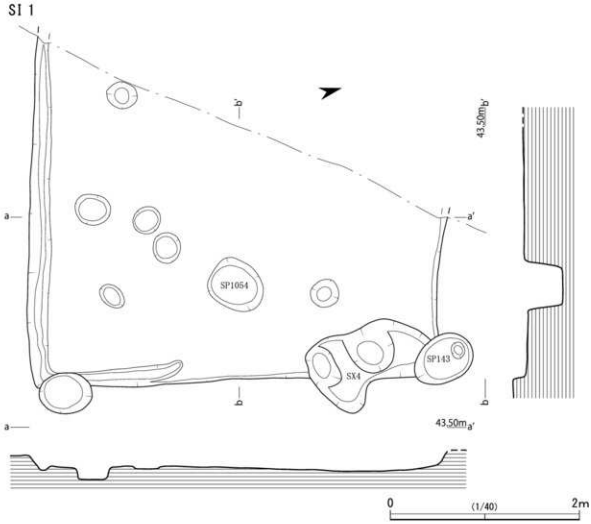
1 遺構

今回の調査区は、第1次調査及び第2次調査の調査対象地の延長上に位置し、南西－北東方向に約120m延びる幅約16 ～ 32mの帯状の範囲で、標高43.10 ～ 43.70mのほぼ平坦な場所である。調査区南西部から中央部にかけては、河川の氾濫が要因と考えられる礫石を大量に含む砂泥層が広がっている。また調査区北東部では、古代の遺物を大量に含む遺物包含層も確認された。

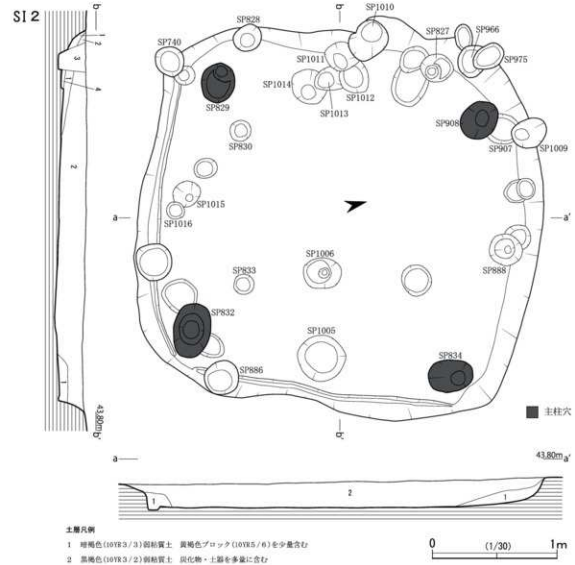
今回の発掘調査では、調査区南西部の北東側と調査区中央部の中心部に遺構が最も集中して確認されており、以後南西部遺構密集区並びに中央部遺構密集区と呼ぶ。中央部遺構密集区においては、膨大な量の遺構が複雑に重複して検出され、切り合い関係の確認が困難なため、出土遺物を基にした先後関係の確認を行う必要も多々あった。

昨年度末に実施した先行調査と今年度の調査の結果、Ⅳ地区では竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、墓、性格不明遺構などを検出した。以下、主な遺構を取り上げ、解説を行いたい。

(1)竪穴建物



第３図　検出遺構実測図（１）



第４図　検出遺構実測図（２）

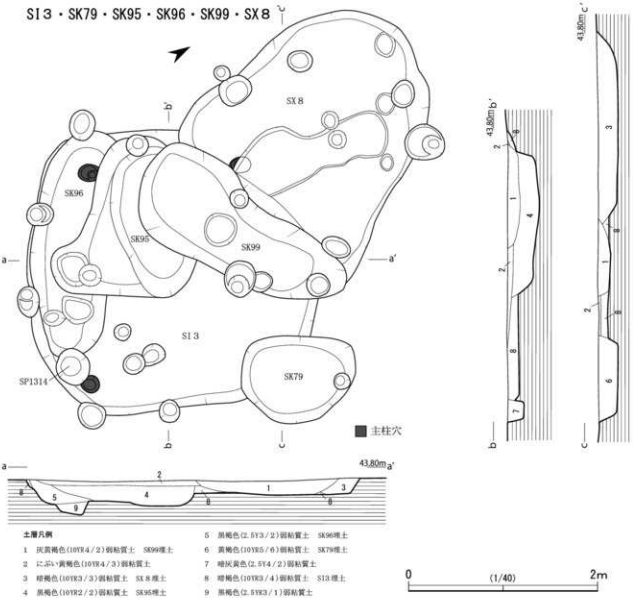
今回の調査では、3棟の竪穴建物が検出された。いずれも形状は隅丸方形である。

ＳＩ１（第3図　図版3）

南西部に位置する建物で、西側部分が調査区外に広がる。北東隅がSX3およびSB2の構成柱穴によって削平されているが、平面形は一辺が約4.5mの隅丸方形と推測される。南側辺縁から東側辺縁の一部にかけて、周溝が確認された。土師器甕2点(1・2)、須恵器甕(3)、須恵器高杯2点(4・6)、須恵器杯身(5)が出土した。出土遺物から古墳時代終末期の建物と考えられる。床面から数個の柱穴が検出されたが、主柱穴とは確認できなかった。

ＳＩ２（第4図　図版4）

中央部遺構密集区に位置する建物で、東西に2.9m、南北に3.1m、床面積8.99mを測る。主柱穴は4本。南側辺縁から東側辺縁にかけて、周溝が確認された。焼土や鉄滓等は検出されていないが、工房跡または貯蔵施設と考えられる。土師器皿(8)、白磁椀(9)、白磁皿(10)、青磁椀(11)、瓦質土器擂鉢(12)、土錘(13)、石鍋(14)及び土師器小片、瓦質土器小片が出土した。出土遺物から、中世後半期の建物と考



第５図　検出遺構実測図（３）

えられる。

ＳＩ３（第５図　図版４）

中央部遺構密集区のやや北東側に位置する建物で、SK79、SK95、SK96、SK99、SX8と重複関係にある。判明している先後関係は、SI3→SK96→SK95→SK99。平面形は、一辺が約3mの隅丸方形と推測される。土師器片が出土したが、小片のため図化していない。建物の東隅がSK95に削平されているが、主柱穴は4本と考えられる。古代に比定されるSX8及びSP1314に切られているため、古代以前の建物と考えられる。

（２）掘立柱建物

狭い範囲に柱穴が密集し、切り合い関係も複雑なため、建物の復元は容易ではなかったが、古代と中世に比定される36棟の建物を復元した。同時期の立て替えも含めて、相当数の建物が建っていたと考えられる。以下、主なものについて述べる。

ＳＢ１（第6図　図版5）

南西端に位置する建物で、桁行2間（4.4m）×梁行2間（3.6m）、床面積15.84㎡を測る。棟方向はN35°Eで、隣接するSB2とほぼ同じである。SK2とSK4によって構成柱穴が削平されたと考えられる。土師器片、須恵器片が出土した。出土遺物から古代の建物と考えられる。

ＳＢ２（第6図　図版5）

南西部に位置する建物で、桁行3間（7.3m）×梁行2間（5.0m）、床面積36.50㎡を測る。棟方向はN40°Eで、個々の柱穴が大きく深い大型の建物である。東側に庇（2.8m）を持つ、片庇建物である。土師質土器鍋（15）、須恵器杯（16）並びに土師器片、須恵器片が出土した。出土遺物から古代前半期の建物と考えられる。

ＳＢ３（第6図　図版5）

南西部に位置する建物で、桁行3間（4.9m）×梁行1間（1.8m）、床面積8.82㎡を測る。棟方向はN38°Eで、須恵器杯蓋片や土師器小片が出土した。隣接するSB2と棟方向がほぼ同じであることや出土遺物から、古代の建物と考えられる。隣接するSB6に付随する建物の可能性がある。

ＳＢ４（第7図　図版5）

南西部に位置する建物で、桁行2間（3.9m）×梁行1間（2.3m）、床面積8.97㎡を測る。棟方向はN48°Wで、土師器小片、瓦質土器小片が出土した。出土遺物から中世の建物と考えられる。

ＳＢ６（第6図　図版5）

南西部遺構密集区に位置する建物で、桁行3間（6.9m）×梁行3間（5.8m）、床面積15.87㎡を測る。棟方向はN44°Eで、SB2とほぼ同じである。須恵器杯片、土師器小片、須恵器小片が出土した。棟方向並びに出土遺物から、古代の建物と考えられる。

ＳＢ７（第7図　図版5）

南西部遺構密集区に位置する建物で、桁行2間（3.4m）×梁行1間（1.6m）、床面積5.44㎡を測る。棟方向はN49°Wで、SB4とほぼ同じである。土師器皿小片、瓦質土器鍋片が出土した。出土遺物から中世の建物と考えられる。隣接するSB9に付随する建物の可能性がある。

ＳＢ８（第8図　図版5）

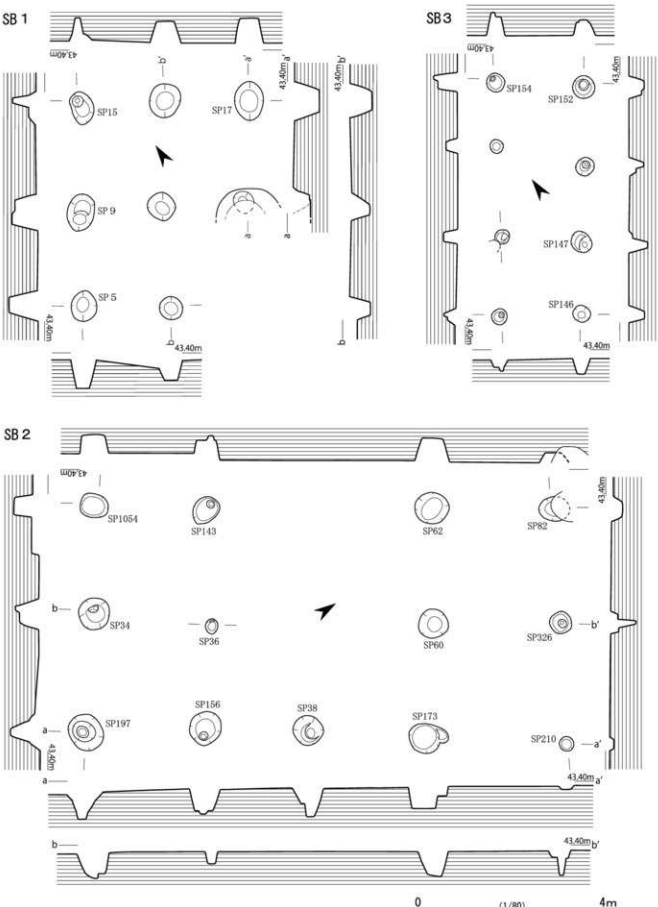
南西部遺構密集区に位置する建物で、桁行2間（3.2m）×梁行1間（2.1m）、床面積6.72㎡を測る。棟方向はN37°Eで、隣接するSB11とほぼ同じである。土師器皿片、土師器杯片、土師質土器羽釜小片、土師質土器鍋小片が出土した。出土遺物から中世後半期の建物と考えられる。

ＳＢ９（第8図　図版5）

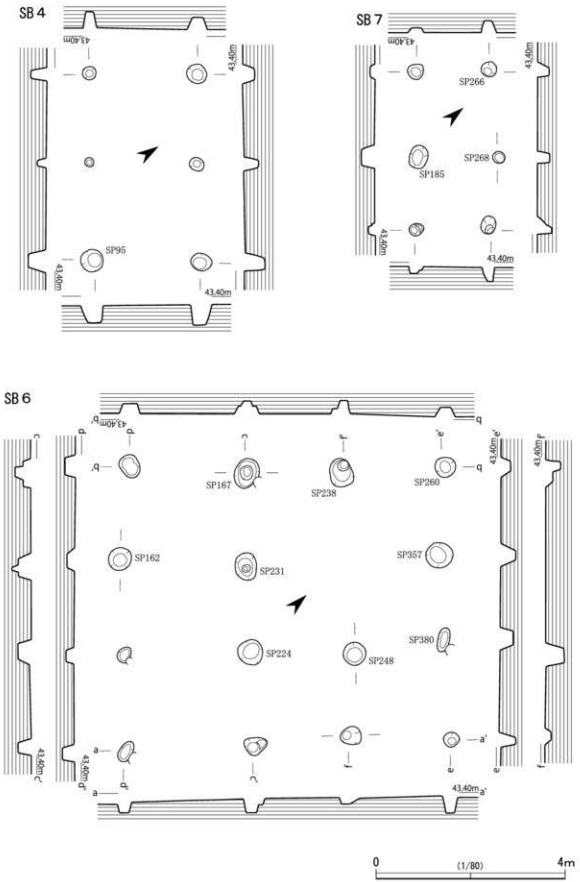
南西部遺構密集に位置する建物で、桁行2間（4.5m）×梁行2間（4.3m）、床面積19.35㎡を測る。棟方向はN60°Wで、隣接するSB7とほぼ同じである。土師器皿小片、土師器杯小片、瓦質土器小片、青磁片、白磁片が出土した。出土遺物から中世前半期の建物と考えられる。

ＳＢ13（第8図　図版5・6）

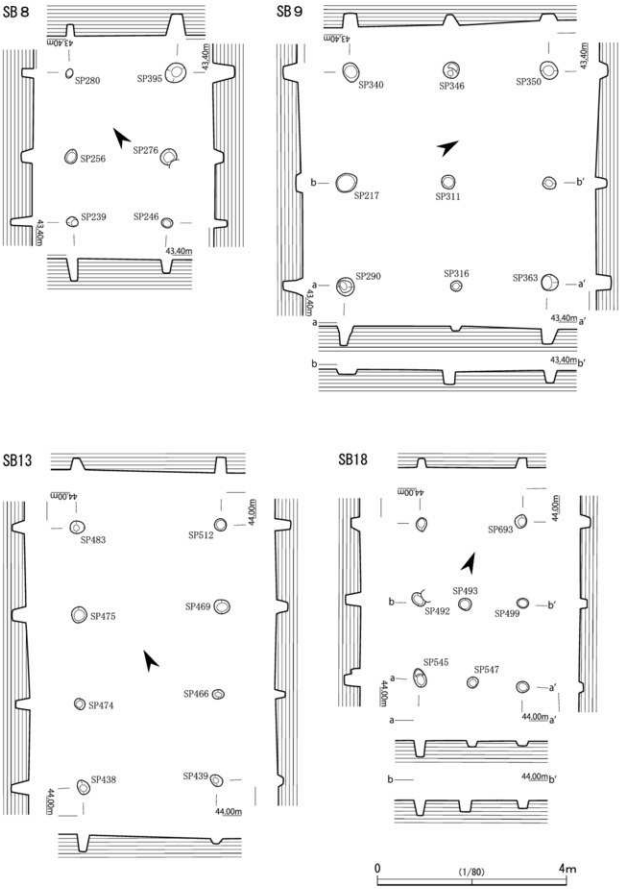
中央部に位置する建物で、桁行3間（5.4m）×梁行1間（2.9m）、床面積15.66㎡を測る。棟方向はN29°Eで、隣接するSB11・SB16・SB20とほぼ同じである。土師器皿小片、土師器杯小片、青磁椀片、土師質土器小片が出土した。出土遺物から中世後半期の建物と考えられる。



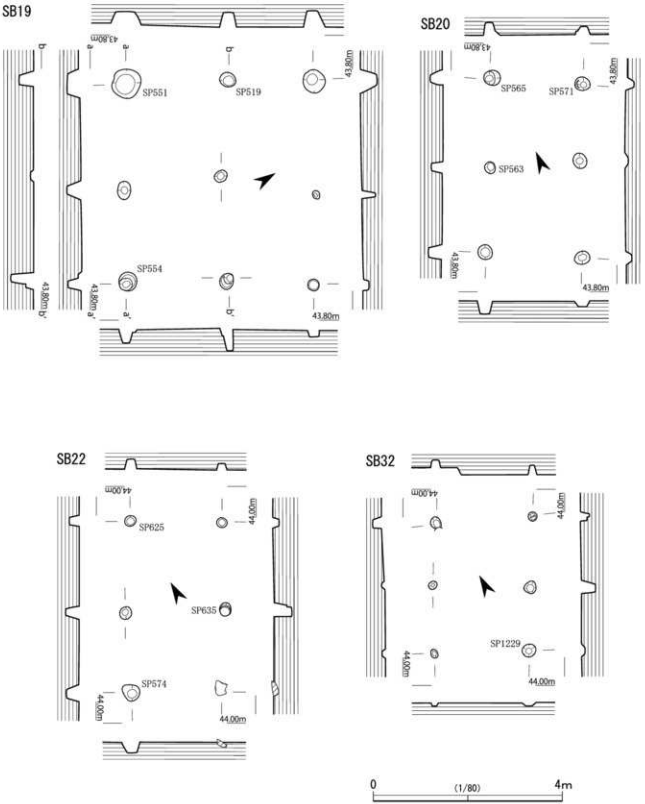
第６図　検出遺構実測図（４）



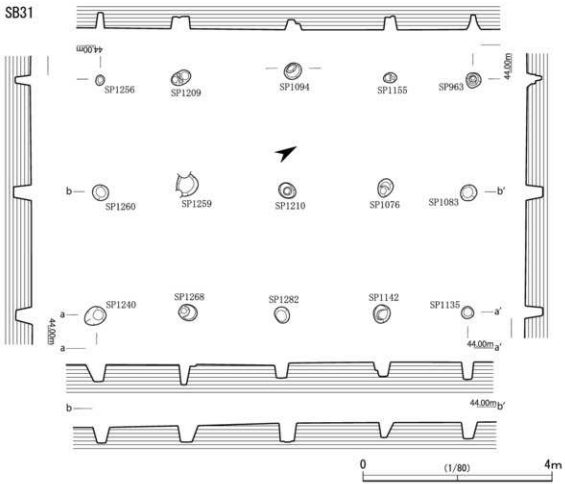
第７図　検出遺構実測図（５）



第８図　検出遺構実測図（６）



第９図　検出遺構実測図（７）



第 10 図　検出遺構実測図（８）

ＳＢ18（第8図　図版6）

中央部に位置する建物で、桁行2間（3.4m）×梁行2間（2.2m）、床面積7.48㎡を測る。棟方向はN24°Wで、土師器杯（18）、土師器小片、瓦質土器小片が出土した。出土遺物から中世後半期の建物と考えられる。同時期に比定されるSB15と重複するが、先後関係は不明である。

ＳＢ19（第9図　図版6）

中央部に位置する建物で、桁行2間（4.3m）×梁行2間（4.1m）、床面積17.63㎡を測る。棟方向はN58°Wで、土師器杯2点（19・20）、土師器小片、白磁椀片が出土した。出土遺物から古代後半期の建物と考えられる。

ＳＢ20（第9図　図版6）

中央部遺構密集区に位置する建物で、桁行2間（3.7m）×梁行1間（2.0m）、床面積7.40㎡を測る。棟方向はN24°Eで、土師器皿片が出土した。出土遺物から中世の建物と考えられる。

ＳＢ22（第9図　図版6）

中央部遺構密集区に位置する建物で、桁行2間（3.5m）×梁行1間（2.0m）、床面積7.00㎡を測る。棟方向はN29°Eで、土師器皿2点（22・23）、土師器皿片が出土した。出土遺物から中世の建物と考えられる。同時期に比定されるSB25と重複するが、先後関係は不明である。

ＳＢ31（第10図　図版6）

中央部に位置する建物で、桁行4間（7.8m）×梁行2間（5.0m）、床面積39.00㎡を測る。棟方向はN29°Eで、Ⅳ地区で確認された36棟中最大規模を誇る。白磁皿（29）、土師質土器羽釜（30）、土師器小片並びに白磁椀小片が出土した。出土遺物から中世の建物と考えられる。

ＳＢ32（第9図　図版6）

中央部に位置する建物で、桁行2間（2.8m）×梁行1間（2.0m）、床面積5.60㎡を測る。棟方向はN27°Eで、重複するSB31とほぼ同じであり、いずれも中世の建物と考えられるが、先後関係は不明である。土師器小片、土師質土器足鍋脚片が出土した。また、建物の東側に隣接するSA1から土師器椀（242）が出土しており、時代並びに位置関係からSB32に伴うものである可能性が高い。

（3）柱穴

今回検出された柱穴は、全部で約2900個を数え、36棟の掘立柱建物が復元された。遺物が出土した柱穴は1300個あまりで、全柱穴の半数近くにのぼる。以下、主なものについて述べる。

ＳＰ144（第11図　図版8）

南西部に位置する。平面形は長軸24cm、短軸21cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。埋土下層から土師器椀（52）が出土した。

ＳＰ174（第11図　図版8）

南西部遺構密集区に位置する。平面形は長軸54cm、短軸45cmの不整円形を呈し、深さは32cmを測る。埋土上層から青磁椀（75）が出土した。

ＳＰ200（第11図）

南西部遺構密集区に位置する。平面形は長軸51cm、短軸37cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。埋土上層から瓦質土器足鍋脚（107）が出土した。

ＳＰ202（第11図　図版8）

南西部遺構密集区に位置する。SK41に切られる。残存する平面形は長軸25cm、短軸29cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。埋土中層から土師器椀（51）が出土した。

ＳＰ228（第11図）

南西部遺構密集区に位置する。平面形は長軸56cm、短軸39cmの不整円形を呈し、深さは37cmを測る。埋土から瓦質土器甕（115）、砥石（121）が出土した。

ＳＰ426（第11図　図版8）

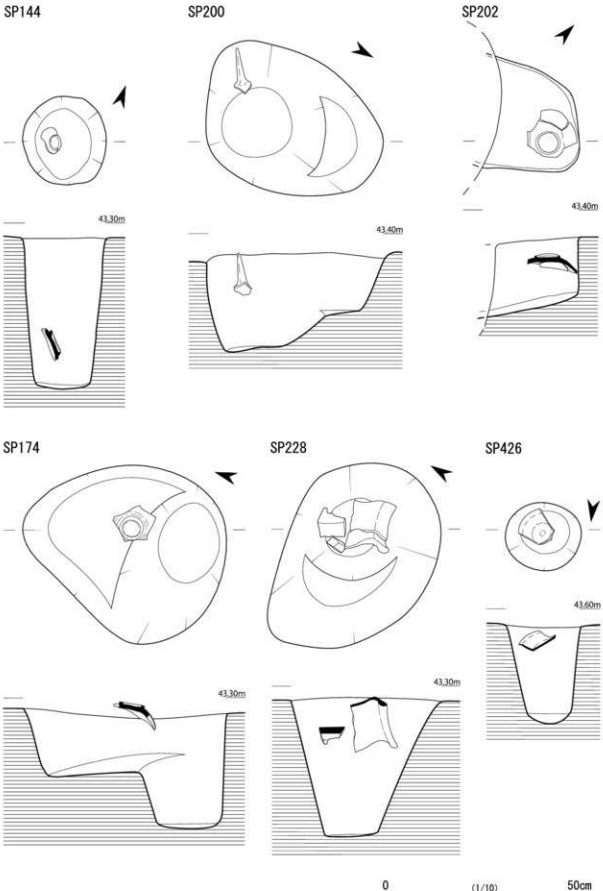
中央部南端に位置する。平面形は長軸20cm、短軸18cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土上層から土師器杯（50）が出土した。

ＳＰ547（第12図　図版8）

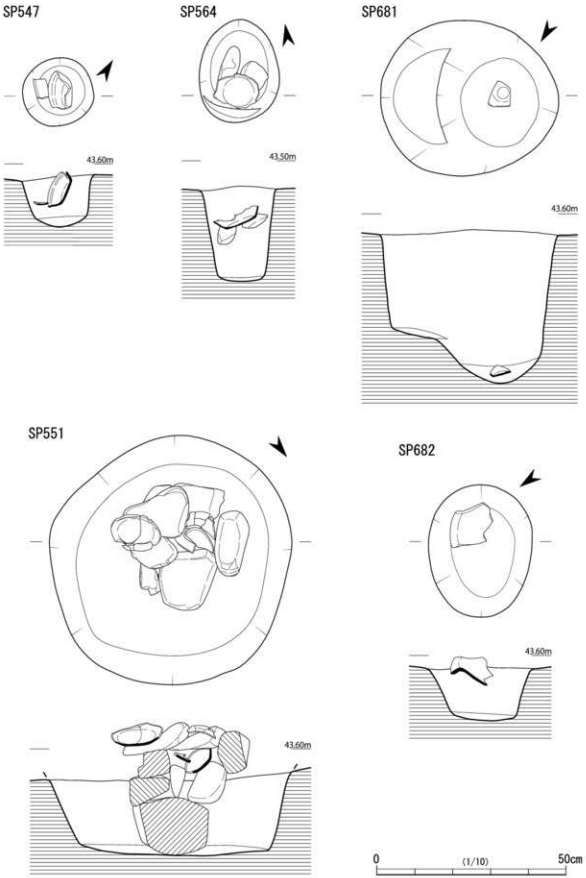
中央部南端に位置する。平面形は長軸19cm、短軸18cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。SB18の構成柱穴である。埋土中層から土師器杯（18）が出土した。

ＳＰ551（第12図　図版8）

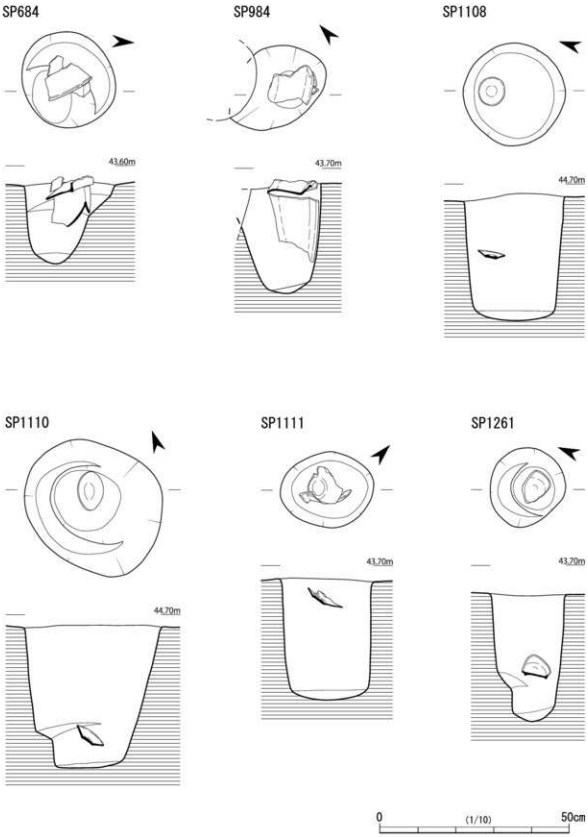
中央部西側に位置する。平面形は長軸66cm、短軸64cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。SB19の構成柱穴である。埋土中の積み重なった礫石の直上から土師器杯2点（19・20）が出土した。



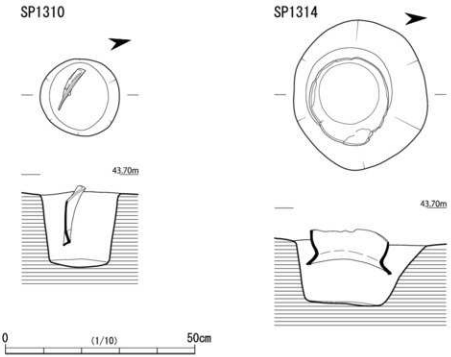
第 11 図　検出遺構実測図（９）



第 12 図　検出遺構実測図（10）



第 13 図　検出遺構実測図（11）



第 14 図　検出遺構実測図（12）

ＳＰ564（第12図）

中央部遺構密集区に位置する。平面形は長軸27cm、短軸21cmの楕円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土中層から土師器杯(46)が出土した。

ＳＰ681（第12図）

中央部遺構密集区に位置する。平面形は長軸47cm、短軸40cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。埋土下層から土師器杯(24)が出土した。SB24の構成柱穴である。

ＳＰ682（第12図）

中央部遺構密集区に位置する。平面形は長軸35cm、短軸27cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。埋土上層から瓦質土器鍋(97)が出土した。

ＳＰ984（第13図　図版8）

中央部遺構密集区に位置する。他の柱穴に切られる。残存する平面形は長軸28cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さは28cmを測る。埋土中層から瓦質土器羽釜(93)が出土した。

ＳＰ1108（第13図　図版9）

中央部遺構密集区に位置する。平面形は長軸28cm、短軸26cmの円形を呈し、深さは33cmを測る。埋土中層から土師器皿(66)が出土した。

ＳＰ1110（第13図　図版9）

中央部遺構密集区に位置する。平面形は長軸39cm、短軸32cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。埋土下層から土師器皿(68)が出土した。

ＳＰ1111（第13図）

中央部遺構密集区に位置する。平面形は長軸25cm、短軸20cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。埋土

上層から土師器皿2点(67・69)、瓦質土器鍋(94)、瓦質土器鍋脚(108)が出土した。

ＳＰ1261(第13図　図版9)

中央部北東側に位置する。平面形は長軸21cm、短軸19cmの円形を呈し、深さは34cmを測る。埋土中層から土師器椀(31)が出土した。SA1の構成柱穴である。

ＳＰ1310（第14図　図版9)

北東部に位置する。平面形は長軸21cm、短軸20cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。埋土から瓦質土器羽釜(90)が出土したが、後世の開発により遺構上中部が土器ごと削平されている。

ＳＰ1314(第14図　図版9)

中央部北東側に位置する。平面形は長軸21cm、短軸20cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。埋土中層から土師器甕(35)が伏せられた状態で出土した。建物廃絶時の地鎮行為によるものと考えられる。

(4)土坑

今回の調査範囲では、104基の土坑が検出された。なかでも古代の土坑は調査区の南西側に集中している。以下、主なものについて述べる。

ＳＫ４(第15図　図版9)

南西端に位置する。平面形は長軸143cm、短軸135cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。埋土は褐色の単層。SB1の南隅構成柱穴の上からST1が造られ、後にSK4がST2の埋土直上まで掘り込まれた。土師質土器羽釜(127)、土師器椀(128)が出土した。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ８(第15図　図版9)

南西端に位置する。平面形は長軸124cm、短軸82cmの楕円形を呈し、深さは25cmを測る。須恵器杯蓋(132)、須恵器杯(133)、須恵器高杯(134)が出土した。出土遺物から、古代の遺構と考えられる。

ＳＫ12(第15図　図版9)

南西端に位置する。平面形は長軸90cm、短軸57cmの不整円形を呈し、深さは13cmを測る。製塩土器2点(136・137)が出土した。出土遺物から、古代の遺構と考えられる。

ＳＫ23(第15図　図版10)

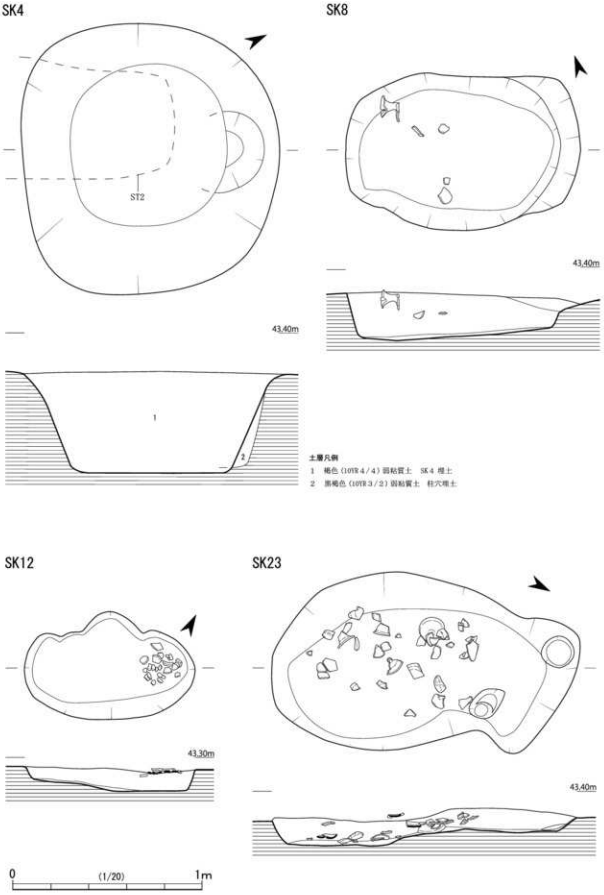
南西部に位置する。平面形は長軸160cm、短軸92cmの不整長円形を呈し、深さは18cmを測る。埋土は褐色の単層。土師器甕4点(142 ～ 145)、須恵器杯蓋3点(146 ～ 148)、須恵器杯身(149)が出土した。出土遺物から、古代の遺構と考えられる。

ＳＫ27(第16図　図版11)

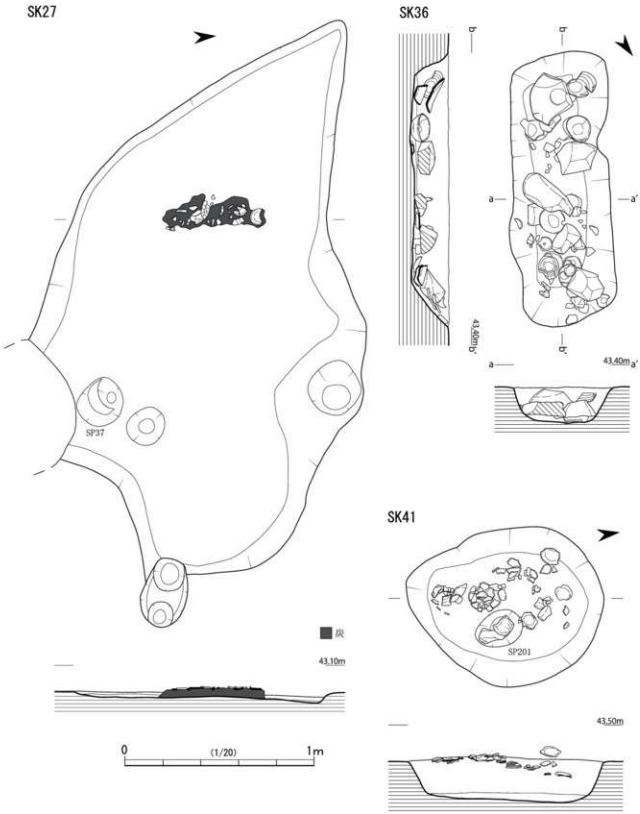
南西部に位置する。平面形は長軸310cm、短軸178cmの不整長円形を呈し、深さは7cmを測る。土師器皿2点(150・151)が出土した。埋土はにぶい黄褐色の単層。出土遺物から、中世前半期の遺構と考えられる。埋土中の炭の放射性炭素年代測定結果は、12世紀後半から13世紀初頭の年代値を示すとの所見を得ている。詳細は第Ⅳ章を参照されたい。

ＳＫ36(第16図　図版10)

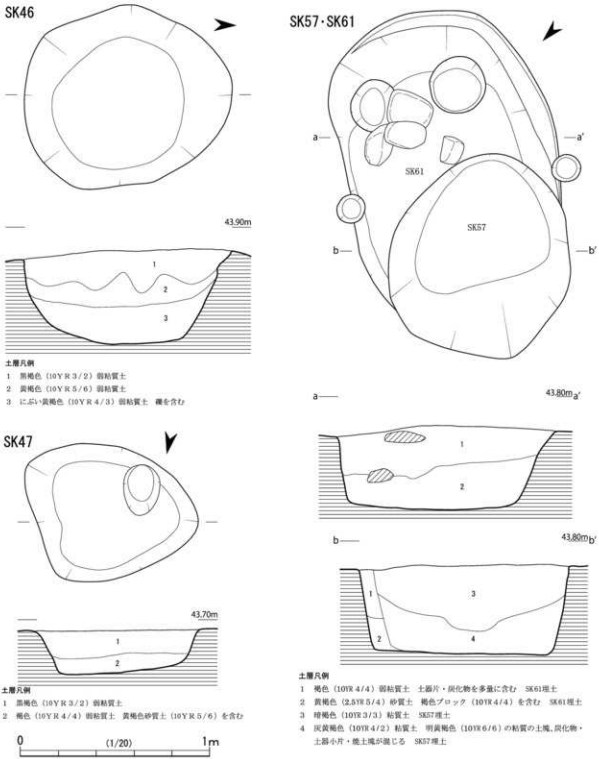
南西部に位置する。平面形は長軸145cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈し、深さは19cmを測る。土師器皿15点(152 ～ 166)、土師器杯5点(167 ～ 181)、土師質土器羽釜(182)、瓦質土器捏ね鉢(183)がまとまって出土し、良好な一括資料となった。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。



第 15 図　検出遺構実測図（13）



第 16 図　検出遺構実測図（14）

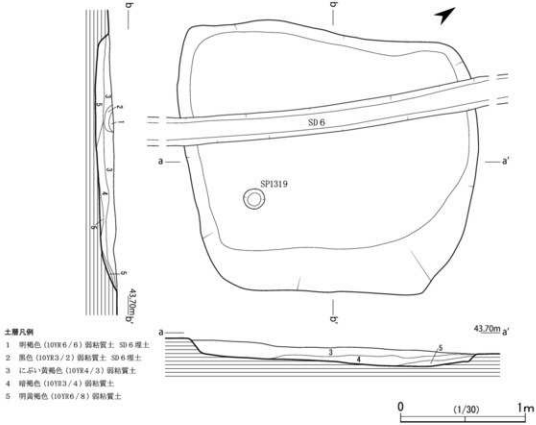


第 17 図　検出遺構実測図（15）

ＳＫ41（第16図　図版11）

南西部の遺構密集区に位置する。平面形は長軸104cm、短軸83cmの楕円形を呈し、深さは22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色の単層。土師器杯4点（190 ～ 193）、土師器椀（194）が出土した。出土遺物から、中世前半期の遺構と考えられる。

SK101



第 18 図　検出遺構実測図（16）

ＳＫ46（第17図　図版11）

中央部に位置する。平面形は長軸110cm、短軸94cmの長円形を呈し、深さは51cmを測る。埋土は3層に分かれる。土師器片並びに青磁片が出土したが、小片のため図化していない。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ47（第17図）

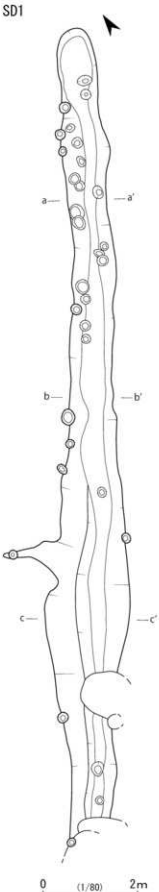
中央部に位置する。平面形は長軸95cm、短軸73cmの楕円形を呈し、深さは24cmを測る。埋土は2層。土師器片が出土したが、小片のため図化していない。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

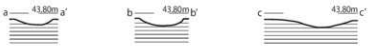
ＳＫ57（第17図）

中央部の遺構密集区に位置する。平面形は長軸107cm、短軸94cmの楕円形を呈し、深さは46cmを測る。SK61を切る。埋土は2層に分かれる。土師器皿5点（198 ～ 202）、土師器杯4点（203 ～ 206）、土師質土器足鍋（207）、瓦質土器鍋（208）、土師質土器鍋（209）、瓦質土器足鍋脚（210）を含む大量の土器片が出土し、良好な一括資料となった。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＫ61（第17図　図版11）

中央部の遺構密集区に位置し、SK57に切られる。残存する平面形は長軸145cm、短軸113cmの楕円形を呈し、深さは44cmを測る。埋土は2層に別れ、上層は多量の土器片と炭化物並びに30cm大の礫石数個を含む。土師器皿3点（211 ～ 213）、土師器杯3点（214 ～ 216）、土師質土器羽釜（217）が出土した。出土





第 19 図　検出遺構実測図（17）

遺物から、中世前半期の遺構と考えられる。

ＳＫ101（第18図　図版11・12）

北東部に位置する。平面形は長軸233cm、短軸212cmの隅丸方形を呈し、深さは13cmを測る。平面形から竪穴建物の可能性も考えたが、遺構の規模並びに断面が皿状に立ち上がること、床面から浅い柱穴1個しか検出されなかったことから、土坑と判断した。埋土は4層に分かれる。遺物は出土していないが、古代の遺物を含む包含層の下から検出されたので、時代は古代以前と考えられる。SD6に切られる。

（5）溝

今回の調査では、13条の溝が検出された。いずれも調査区の北東側に位置するが、後世の削平により、総じて浅い。以下、主なものについて述べる。

ＳＤ１（第19図　図版12）

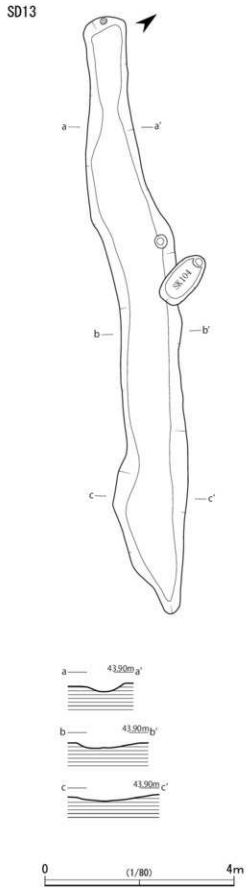
中央部の南端に位置し、北東－南西方向に主軸をとる。残存長は17.08m、最大幅1.80m、深さ６～15cmで、SD3を切る。埋土は暗褐色の単層。瓦質土器甕(222)、土師器柱状高台付皿(223)、土師質土器羽釜(224)、瓦質土器鍋2点(225・226)、瓦質土器足鍋4点(227 ～ 230)及び大量の土師器片、土師質土器片、瓦質土器片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

ＳＤ13（第19図　図版12）

北東端に位置し、北西－南東方向に主軸をとる。残存長は12.64m、最大幅1.80m、深さ8～ 18 cmで、礫層に掘り込まれた溝である。埋土はにぶい黄褐色の単層。須恵器杯蓋(231)、須恵器杯(232)、須恵器壺(233)が出土した。SK104に切られる。出土遺物から、古代の遺構と考えられる。埋土土位から打製石斧2点(234・235)が出土したが、混入物と考えられる。

（6）墓

今回の調査では、4基の墓が検出された。時代はいずれも中世に比定され、副葬品が良好な状態で出土した。4基とも人骨が残存していないため、性別や埋葬形態は不明であるが、墓坑の規模から成人のものが3基、小児のものが1基と考えられる。



第 20 図　検出遺構実測図（18）

ＳＴ１（第21図　図版13）

南西端に位置する土坑墓で、西側の一部が後世の水路造成の際に削平されている。残存する平面形は長軸102cm、最大幅65cmの隅丸長方形を呈し、深さは26cmを測る。埋土は灰黄褐色の単層で、SB1の構成柱穴を切る。土師器杯(236)並びに木製容器(238)に納められていた銅鏡(237)が出土した。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＴ２（第21図　図版13）

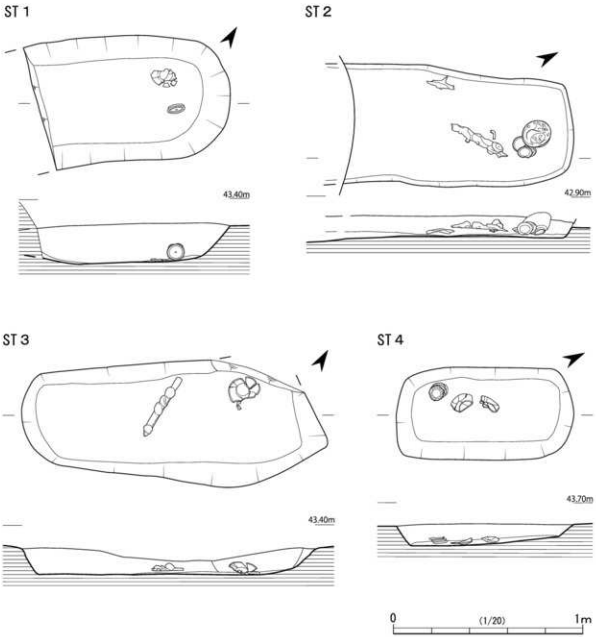
南西端に位置する土坑墓で、SK2及びSK4の床面直下で検出された。残存する平面形は長軸115cm、最大幅64cmの隅丸長方形を呈し、深さは11cmを測る。土師器皿5点(239～243)、青磁椀(244)、鉄鏃(245)、鉄製小刀(246)が出土した。自然科学分析の結果、周辺土に比べてカルシウム含有量が埋土下層でわずかに多いという所見を得ている。詳しい分析結果は、第Ⅳ章を参照されたい。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＴ３（第21図　図版14）

南西部の北端に位置する土坑墓で、南側の一部がSB2の北東隅構成柱穴を切る。北側の一部が調査区外に広がるが、平面形は長軸162cm、最大幅66cmの隅丸長方形を呈し、深さは15cmを測る。床面から土師器杯(247)、鉄製小刀(248)が出土した。人骨は確認できなかったが、遺物の出土状況から頭位を北に向けていたと推定される。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。

ＳＴ４（第21図　図版14）

中央部の東側に位置し、南北方向に主軸をとる。長軸94cm、最大幅49cmの隅丸長方形を呈し、深さは11cmを測る。土師器皿4点(249～252)、土師器杯(253)が出土した。特に土師器杯は床面に落ちて割れた状況を示していることから、鉄釘等こそ検出されなかったが木棺墓であり、埋葬時に棺の上に副葬品として置かれた土師器杯が崩れ落ちたものと推測される。自然化学分析では、周辺土と埋土の間にカルシウム含量の有意な差が認められなかった。詳しい分析結果は、第Ⅳ章を参照されたい。出土遺物から、中世の遺構と考えられる。



第 21 図　検出遺構実測図（19）

(7)性格不明遺構

ＳＸ８（第５図　図版４）

中央部遺構密集区のやや北東側に位置し、平面形は長軸2.5m、最大幅2.3mの長楕円形を呈する。SI3、SK99と重複しており、先後関係はSI3→SX8→SK99。土師器甕2点（265・266）ならびに土師器小片が出土した。出土遺物から、古代前半期の遺構と考えられる。他の性格不明遺構は不整形で断面が皿状を呈するものが多いのに対し、SX8は断面形が逆台形を呈し、しっかりとした掘り肩並びに平坦な床面を有する。

第１表　掘立柱建物一覧表

遺構番号	地区	規模（間）	検方向	柱間 桁　行 建物の南東隅から（m）	柱間 梁　行 建物の南東隅から（m）	面積（㎡）	出土遺物	備　考
SB1	Ⅳ	２×２	N 35° E	4.4(2.2・2.2)	3.6(1.8・1.8)	15.84	土師器　須恵器	柱間北西隅から 古代
SB2	Ⅳ	３×２	N 40° E	7.3(2.6・2.3・2.4)	5.0(2.6・2.4)	36.50	土師器　須恵器	古代 東面に庇(2.8 m)
SB3	Ⅳ	３×１	N 38° E	4.9(1.5・1.7・1.7)	1.8	8.82	土師器　須恵器	古代
SB4	Ⅳ	２×１	N 48° W	3.9(2.0・1.9)	2.3	8.97	土師器　瓦質土器	中世
SB5	Ⅳ	２×１	N 2° E	5.3(2.7・2.6)	2.5	13.25	土師器　瓦質土器	柱間北西隅から 中世
SB6	Ⅳ	３×３	N 44° E	6.9(2.6・2.1・2.2)	5.8(1.9・2.0・1.9)	15.87	土師器　須恵器	古代
SB7	Ⅳ	２×１	N 49° W	3.4(1.6・1.8)	1.6	5.44	土師器　瓦質土器	中世
SB8	Ⅳ	２×１	N 37° E	3.2(1.4・1.8)	2.1	6.72	土師器　瓦質土器 土師質土器	中世
SB9	Ⅳ	２×２	N 60° W	4.5(2.2・2.3)	4.3(2.0・2.3)	19.35	土師器　瓦質土器 土師質土器　白磁 青磁　金属製品	中世
SB10	Ⅳ	（２×１）	N 26° E	4.9(2.5・2.4)	2.3	—	土師器　土師質土器	中世
SB11	Ⅳ	２×１	N 34° E	5.0(2.6・2.4)	2.3	11.50	土師器　瓦質土器	中世
SB12	Ⅳ	１×１	N 27° E	2.8	2.4	6.72	土師器　瓦質土器	中世
SB13	Ⅳ	３×１	N 29° E	5.4(1.9・1.8・1.7)	2.9	15.66	土師器　青磁 土師質土器	中世
SB14	Ⅳ	（３×１）	N 27° E	7.5(2.5・3.1・1.9)	2.4	—	土師器	中世
SB15	Ⅳ	２×２	N 68° W	4.9(2.6・2.3)	3.4(1.8・1.6)	16.66	土師器　青磁	北面に庇(1.1 m) 中世
SB16	Ⅳ	２×１	N 28° E	4.0(1.9・2.1)	2.1	8.40	土師器	中世
SB17	Ⅳ	（１×１）	N 81° E	1.5	1.5	—	土師器	中世
SB18	Ⅳ	２×２	N 24° W	3.4(1.7・1.7)	2.2(1.1・1.1)	7.48	土師器　瓦質土器	中世
SB19	Ⅳ	２×２	N 58° W	4.3(2.2・2.1)	4.1(1.9・2.2)	17.63	土師器　白磁	古代
SB20	Ⅳ	２×１	N 24° E	3.7(2.1・1.6)	2.0	7.40	土師器	中世
SB21	Ⅳ	２×１	N 48° W	3.0(1.3・1.7)	2.0	6.00	土師器　瓦質土器	中世
SB22	Ⅳ	２×１	N 29° E	3.5(1.7・1.8)	2.0	7.00	土師器	中世
SB23	Ⅳ	３×２	N 46° W	4.3(1.4・1.4・1.5)	2.9(1.4・1.5)	12.47	土師器 土師質土器	中世
SB24	Ⅳ	２×２	N 26° E	4.0(1.9・2.1)	3.3(2.0・1.3)	13.20	土師器　銅銭 土師質土器	中世
SB25	Ⅳ	３×２	N 62° W	4.3(1.4・1.5・1.4)	3.4(1.6・1.8)	14.62	土師器　瓦質土器	中世
SB26	Ⅳ	２×１	N 35° E	4.0(2.3・1.7)	2.0	8.00	土師器　瓦質土器 白磁	中世
SB27	Ⅳ	２×１	N 18° E	3.2(1.7・1.5)	1.9	6.08	土師器　白磁 青磁	中世
SB28	Ⅳ	３×２	N 25° E	4.0(1.1・1.3・1.6)	3.4(1.6・1.8)	13.60	土師器　瓦質土器 土師質土器	柱間北西隅から 中世
SB29	Ⅳ	２×１	N 24° E	3.1(1.4・1.7)	1.7	5.27	土師器　青磁	中世
SB30	Ⅳ	３×２	N 34° E	5.8(2.1・1.9・1.8)	3.5(1.7・1.8)	20.30	緑釉陶器　土師器 瓦質土器	中世
SB31	Ⅳ	４×２	N 29° E	7.8(1.8・2.1・2.1・1.8)	5.0(2.5・2.5)	39.00	土師器　瓦質土器 白磁　土師質土器	中世
SB32	Ⅳ	２×１	N 27° E	2.8(1.3・1.5)	2.0	5.60	土師器　土師質土器	中世
SB33	Ⅳ	（２×１）	N 28° E	3.9(2.0・1.9)	1.7	—	土師器　瓦質土器	中世
SB34	Ⅳ	（２×１？）	N 27° E	5.0(2.6・2.4)	?	—		柱間北西隅から 中世か．
SB35	Ⅳ	（３×３）	N 71° W	5.6(2.1・1.9・1.6)	3.4(0.9・1.5・1.0)	—	土師器	柱間北西隅から 中世
SB36	Ⅳ	２×１	N 27° E	4.3(2.3・2.0)	2.5	10.75	土師器	中世

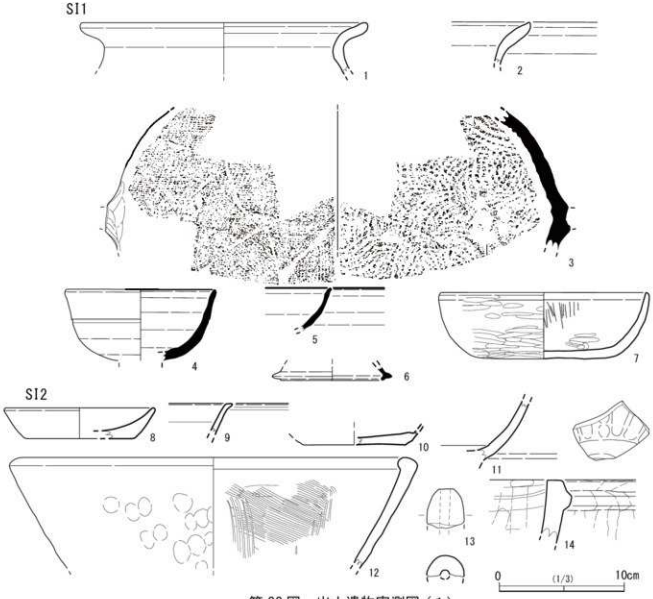
2 遺物

調査の結果、縄文時代晩期、古墳時代、古代(奈良時代～平安時代)、中世(鎌倉時代～室町時代)の遺物が出土した。遺物の種類は、縄文土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・輸入磁器・国産陶器、土製品、石製品、金属製品、木製品、鉄器、銭貨等である。竪穴住居・柱穴・土坑・溝・墓などの遺構に伴う資料の内訳をみると圧倒的に柱穴出土のものが多いが、土坑や墓からも良好な一括資料を得ることができた。また、遺物包含層からは時期を知ることができる資料を採取している。

以下、遺構ごとに代表的な出土遺物を説明する。なお、各遺物の法量及び調整・特徴等は、遺物観察表に記載した。

(1)竪穴建物出土遺物(第22図　図版15)

①ＳＩ１　1・2は土師器甕の口縁部である。頸部から口縁にかけて大きく外反し、端部はやや上方につまみあげて終わる。3～6は須恵器。3は把手付きの甕胴部、4は脚部を欠損した高杯である。5は杯、6は高杯脚部先端である。1～6はいずれも床面直上で出土している。7はＳＩ１埋土上層部から出土した土師器の皿であり、1～6よりやや時期が下る。内外面に丁寧なミガキを施す。



第 22 図　出土遺物実測図（1）

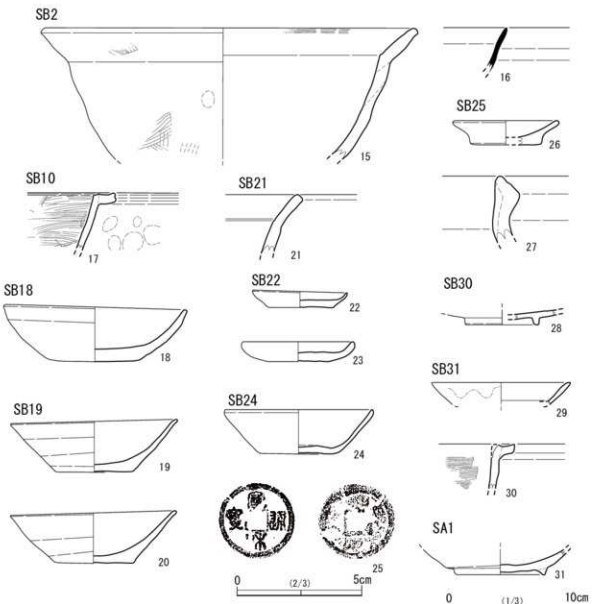
②ＳＩ２　8～14は埋土中～下層から出土した。8は土師器の皿で器壁は厚い。9・10は白磁である。9は椀の口縁部で、直線気味に立ち上がり口縁先端は外側に尖る。10は皿で、底部は蛇の目釉剥ぎ。11は青磁の椀の体部で緩やかに内湾して立ちあがる。鎬連弁を有す。12は瓦質土器の擂鉢である。13は土師質焼成の紡錘形の管状土錘。14は滑石製石鍋の口縁部で、ケズリ調整。12以外は周辺建物群の時期に相応するが、これらはＳＩ２廃絶後に混入したと考えるのが妥当と思われる。

(2)掘立柱建物・柵列出土遺物(第23図　図版16)

15～31および32はそれぞれ、掘立柱建物・柵列を構成する柱穴から出土した。

①ＳＢ２　15は土師質土器の鍋である。体部は緩やかに内湾して立ち上がったのち、大きく外傾して端部に至る。内外面は粗いハケ目調整のちナデ消している。16は須恵器の杯である。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、中ほどでやや外傾して直線的に口唇に至る。

②ＳＢ10　17は土師質土器の羽釜である。鍔が高い位置にあり、水平に短く延びる。



第 23 図　出土遺物実測図（２）

③ＳＢ18　18は土師器の杯である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部でやや上方に屈曲する。器壁は厚く、橙色を呈す。

④ＳＢ19　19・20は土師器の杯である。19・20の体部外面は外傾して直線的に立ち上がり、端部はやや細めで外反して収める。内面は底部と体部の境が明瞭ではなく丸みをもって仕上げ、丁寧なミガキを施す。2点とも浅黄橙色を呈する。周防国府跡船所・浜宮北地区SE5981出土の杯(NO.833)に酷似する(※1)。

⑤ＳＢ21　21は瓦質土器の鍋である。口縁部はやや外傾して直線的に延び、端部は角ばる。

⑥ＳＢ22　22・23は土師器の皿である。体部はやや内湾して短く立ち上がり、端部は丸く収める。22の口縁部の器壁は非常に薄い。

⑦ＳＢ24　24は土師器の杯で、体部は斜め45度に外傾して直線的に開き、口縁に至る。器壁は薄く橙色を呈す。25は北宋の渡来銭貨で、「宣和通寶」(1119年～)の銘がある。ＳＰ679から出土。

⑧ＳＢ25　26は円板状の高台をもつ土師器の皿である。体部はやや内湾気味に大きく開いて立ち上がり、短めに終わる。口唇端部は丸く収める。内面は、底面と体部の境が不明瞭で丸みをもった仕上げである。27は瓦質土器の甕の口縁部である。

⑨ＳＢ30　28は緑釉陶器の皿の底部である。素地は須恵質で、内外面に淡緑色の釉薬をかけて丁寧に仕上げている。台形状のケズリ出し高台を有し、京都産である。

⑩ＳＢ31　29は白磁の皿、30は土師質土器の羽釜である。30の鍔は短く、端部を上方につまみ上げて終わる。内面は丁寧なハケ目調整を施す。

⑪ＳＡ１　31は土師器の椀である。断面三角形の貼付け高台をもつ。

(3)柱穴出土遺物(第24～28図　図版16～20)

32 ～ 124は柱穴から出土した遺物である。できるだけ種類別・器種別にまとめて掲載し、文章にて補足的に説明する。後付の遺物観察表に、出土した柱穴の番号、法量等を記載することとし、文章中では必要以外は割愛する。

32は縄文土器で、晩期の浅鉢小片である。黒色磨研土器で、波状口縁を呈する。

33 ～ 35は土師器の甕である。33・34は口唇に平坦面をもち、内面はハケ目をナデ消している。8世紀後半に出現する豊前北部産の企救型甕の形態に酷似する。(以下、企救型甕と称す。)

36 ～ 41は須恵器である。36は杯蓋で外面被灰。天井部つまみの有無は不明。37・38は杯である。体部は底面からやや外傾して立ち上る。ともに断面台形の貼付け高台を有す。37は立ち上がり部内面に1条の沈線を有す。39 ～ 41は壺の底部である。断面四角ないし台形の高台が「ハ」字形に貼付けられ、接合部は丁寧にナデて仕上げている。41は高台畳付き部分が平坦で、接地面が広い。39 ～ 40よりやや下る時期の産物と考えられる。

42 ～ 50は土師器の杯である。42の底部はヘラ切りで、器壁は厚い。43・44は同じ柱穴から出土した。43の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁はやや外傾して端部に至る。44の体部は直線的に外傾して立ち上がる。43は白色系、44は赤色系に属する。45・46の体部は内湾して立ち上がり、口縁端部に至る。内面は底面と体部の境が不明瞭で丸みをもって仕上げている。45の器壁はやや厚く、46は薄めである 。47の体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁に至る。器高指数(器高 / 口径×100)は0.33。48の器高指数は0.36。49の器高指数は0.28。50の器高指数は0.27。

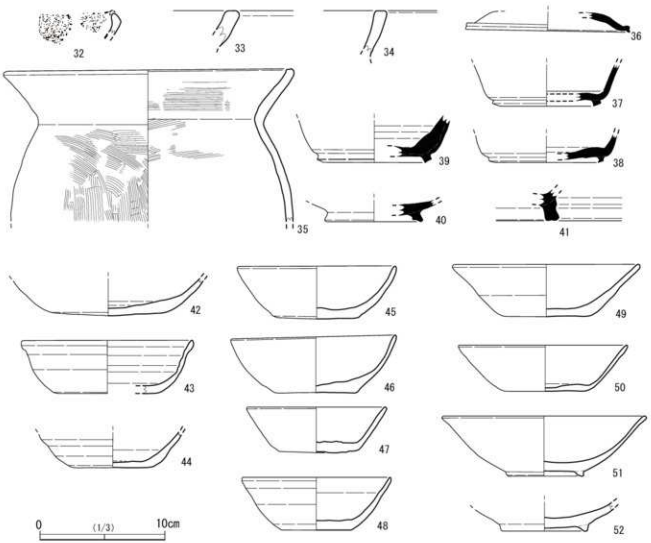
51・52は土師器の椀である。どちらも断面三角形の貼付け高台を有す。51の体部はやや内湾気味に斜め45度に外傾して緩やかに立ち上がり、口縁部手前で外反して端部に至る。器壁は薄く灰白色を呈し、一部に黒斑を有す。

53 ～ 70は土師器の皿で、底部はすべて回転糸切りである。53 ～ 65の体部は斜め外上方につまみあげるように短く立ち上げたのち丸く収めるタイプで、器高は低く0.7cm～ 1.4cmを測る。66 ～ 70は体部が逆「ハ」字形に直線的立ち上がるタイプで、器壁は薄い。68 ～ 70はロクロ成形時の稜線が明瞭に残る。器高指数はそれぞれ、66は0.20、67は0.16、68は0.19、69は0.19、70は0.20である。器高に対して口径が大きい在地系の皿で、灰白～浅黄色を呈する。69は底面に板目圧痕を有し、内面には煤が付着している。67・69は同一の柱穴から出土している。

71は土師器の杯である。体部にロクロ成形時の稜線が明瞭に残る。

72は柱状高台付皿の底部で、橙色を呈す。底面は回転糸切りである。

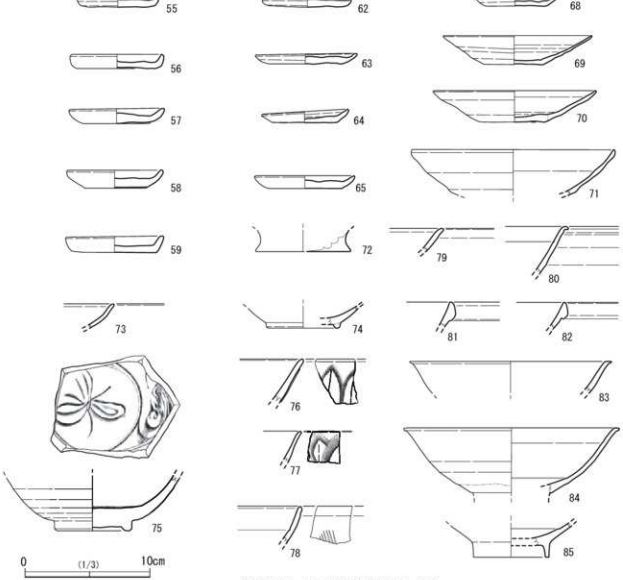
73・74は緑釉陶器である。73は須恵質の皿の口縁部で京都産。淡緑色の釉が施されている。74は土師質の椀底部で、貼付け高台をもつ周防産。黄緑色の釉が施されている。



第 24 図　出土遺物実測図（3）

75 ～ 78は青磁である。75 ～ 77は龍泉窯系の椀である。75は内面・見込み部分に片切り彫りの草花文および劃花文を有す。76・77は外面に幅広の鎬連弁を有す。78は同安窯系の椀で、内面口縁下2cmのところに１条の沈線、外面に櫛描文を有す。

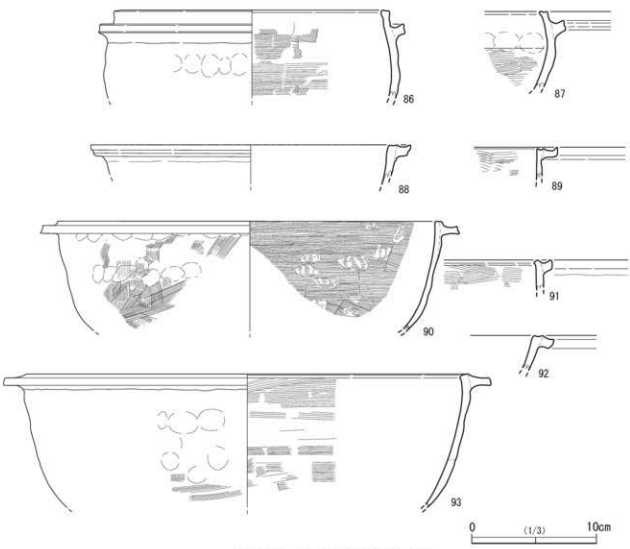
79 ～ 85は白磁である。79は皿で、80 ～ 85は椀である。80の体部は外傾して直線的に口縁に至り、端部は水平方向に短く折れて終わる。内面口縁下約1.1cmのところに１条の沈線を有す。81・82は玉縁状の口縁を有す。83・84の体部は内湾ぎみに立ち上がり、外反して端部に至る。器壁は薄い。83は焼成後、二次的な熱によって釉がとび、素地が露呈している。85は底部で、断面縦長台形状のケズリ出し輪状高台を有す。高台部分は露胎。



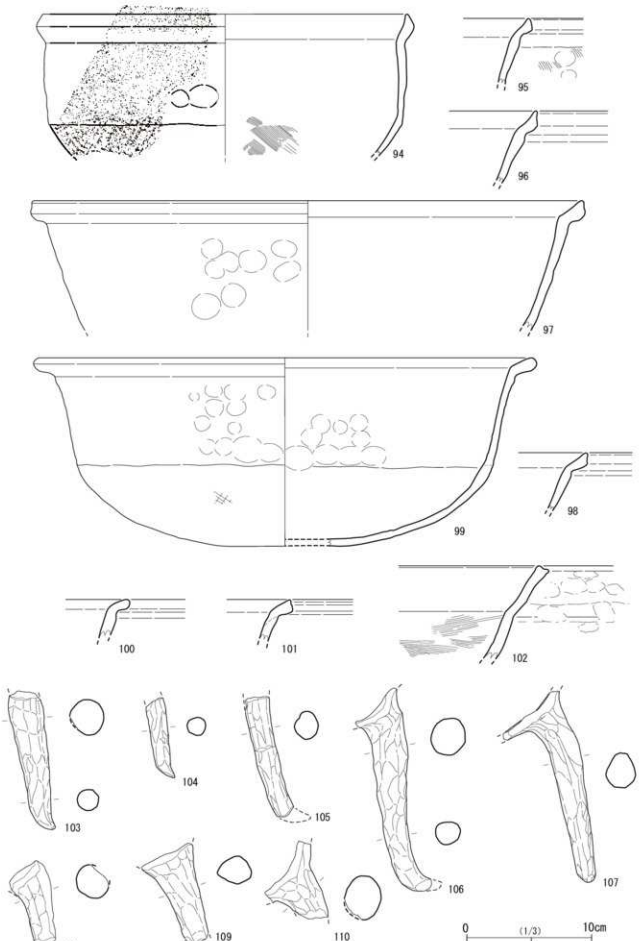
第 25 図　出土遺物実測図（４）

86・89・92は土師質土器の羽釜、87・88・90・91・93は瓦質土器の羽釜である。86・87は鍔の位置が低く、鍔の先端を上方につまみあげ、尖らせて終わる。88 ～ 92は鍔の位置が高く、鍔の先端をつまみあげ、尖らせて終わる。93は鍔の位置が高く、口唇のやや下から水平方向にやや長めに延びる。86・87は口縁径よりも胴部径の方が大きく膨らむ形状をとり、他よりやや先行する時期のものとみられる。口縁～鍔にかけてのつくりは丁寧で、外面は鍔を貼付けたのち指頭により均等に圧を加え、表面をナデ消している。内面は細やかなハケ目調整ののちヨコナデを施す。89 ～ 91及び93の内面も横方向の細やかで丁寧なハケ目調整が施されている。

94 ～ 102は鍋または足鍋の胴部から口縁部片、103 ～ 110は足鍋の脚部である。96・100・104は土師質土器、その他は瓦質土器である。94 ～ 101は口縁外面の直下にナデによる明瞭なくびれを有す。94 ～ 98は口縁部端部を上方につまみあげ、尖らせて終わる。99・100は丸みを帯びた口縁部を有し、「く」字状に短く外傾して口唇に至る。101は外傾した口縁端部に平坦部分を有す。102は体部とほぼ同器厚の口縁部を有し、外傾部分が長く、口唇中央に若干の凹みを形成する。103 ～ 106は脚部先端が屈曲し獣足に疑似させた形状を成すものである。107は胴部本体からやや外に膨らんだのち真直ぐ下に延びる。108 ～ 110については脚部先端を欠損するため、形状は不明である。

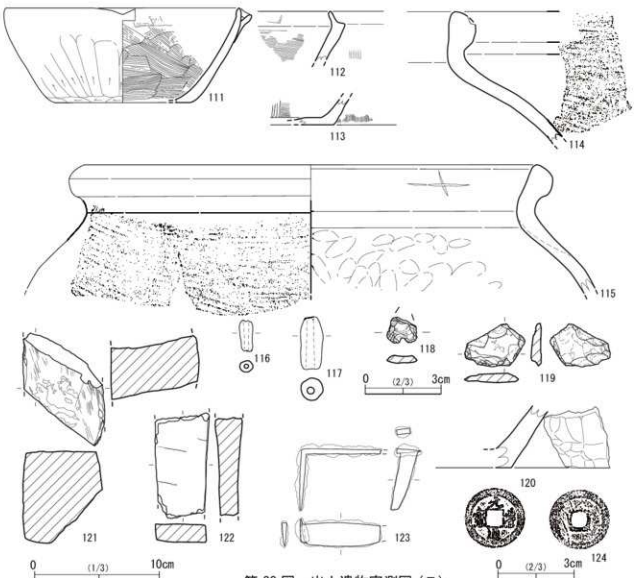


第 26 図　出土遺物実測図（5）



第 27 図　出土遺物実測図（6）

111は土師質土器の捏ね鉢である。小型で、注口部を作出する。内面に細かなハケ目調整、外面に丁寧なケズリを施す。112・113は瓦質土器の擂鉢である。112は口縁部片で、端部は内側を拡張し短くつまみあげて終わる。113は底部片で、体部は60度に外傾して直線的に立ち上がる。114・115は瓦質土器の甕である。口縁部は玉縁状に肥厚し、肩部外面はタタキのちナデ調整を施す。114は肩が大きく外に張り出し、113はやや撫で肩である。 116・117は土師質焼成の管状土錘である。116は出土した土錘の中ではきわめて小型である。118は姫島産黒曜石製の石鏃。先端部を欠損、調整は雑である。119は泥質片岩製打製石斧の剥片である。両面に二次加工を施し、刃部を下位に再形成している。120は石鍋の底部である。滑石製で、内外面ともに比較的丁寧なケズリ調整を施している。外面は被熱により黒変している。121・122は砥石である。ともに4面使用。121は泥岩製の仕上げ砥、122は流紋岩質凝灰岩製の中砥である。123は鉄刀子である。茎部をL字状に90度折り曲げ、転用して鎹にしたものと考えられる。刃部を半損しているが、茎部と同様にL字状に折り曲げた部分が欠損したとみられる。124は北宋の渡来銭貨で「元〇通寶」と読め、「元豊通宝」(1078年～)または「元符通宝」(1098年～)と考えられる。ＳＰ298から出土した。



第 28 図　出土遺物実測図（7）

(4)土坑出土遺物(第29～32図　図版21～26)

①ＳＫ２　125は土師質土器の羽釜である。鍔の位置は高く、断面台形の鍔がほぼ水平に貼付く。126は白磁の皿である。器壁は薄い。

②ＳＫ４　127は土師質土器の羽釜である。鍔の位置は高く、断面長方形で横長の鍔の先端中央に凹みを有す。128は土師器の椀である。断面三角形の貼付け高台を有す。

③ＳＫ５　129は土師器甕の口縁部で、先端は外反して開く。130は土師器把手付き甕の把手である。

④ＳＫ６　131は土師器の杯である。口縁先端を欠損。灰白色を呈す。

⑤ＳＫ８　132 ～ 134は須恵器である。132は杯蓋。天井部中央のつまみの有無は不明。口縁外面に凹線を有す。133は杯で、体部はやや外傾して直線的に立ち上がる。134は高杯である。受部は蓋を逆さにしたような形状を呈し、端部は短く上方に立ち上がる。

⑥ＳＫ９　135は須恵器の杯で「ハ」字形の貼付け高台を有す。口縁を欠損。

⑦ＳＫ12　136・137は製塩土器である。六連式土器で、近辺では赤妻遺跡、吉田遺跡、神郷大塚遺跡で出土例をみる。

⑧ＳＫ13　138は須恵器の壺である。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁先端を欠損。口縁下約2㎝のところに１条の沈線を有す。

⑨ＳＫ20　139は土師器の甕である。企救型甕の口縁部。140は六連式製塩土器である。141は須恵器の杯である。

⑩ＳＫ23　142 ～ 145は土師器の甕である。142・143は同一個体の可能性があり、企救型甕の口縁部と胴部にあたる。142の内外面はヨコナデ。143の外面は粗いハケ目、内面はハケ目をナデ消している。144はやや肥厚した口縁部が短く外反して端部に至る。外面は粗いハケ目。内面は輪積みによる粘土帯の繋ぎ目が残る。ハケ目をナデ消しているが、口縁の一部にハケ目が残る。145の外面はハケ目、内面はハケ目のち指頭によるナデ消し。144・145は同一個体の可能性がある。146 ～ 148は須恵器の杯蓋、149は杯である。146は天井部にボタン状のつまみをもつ。147はつまみの有無は不明。149の体部は斜め45度に外傾して直線的に立ち上がる。

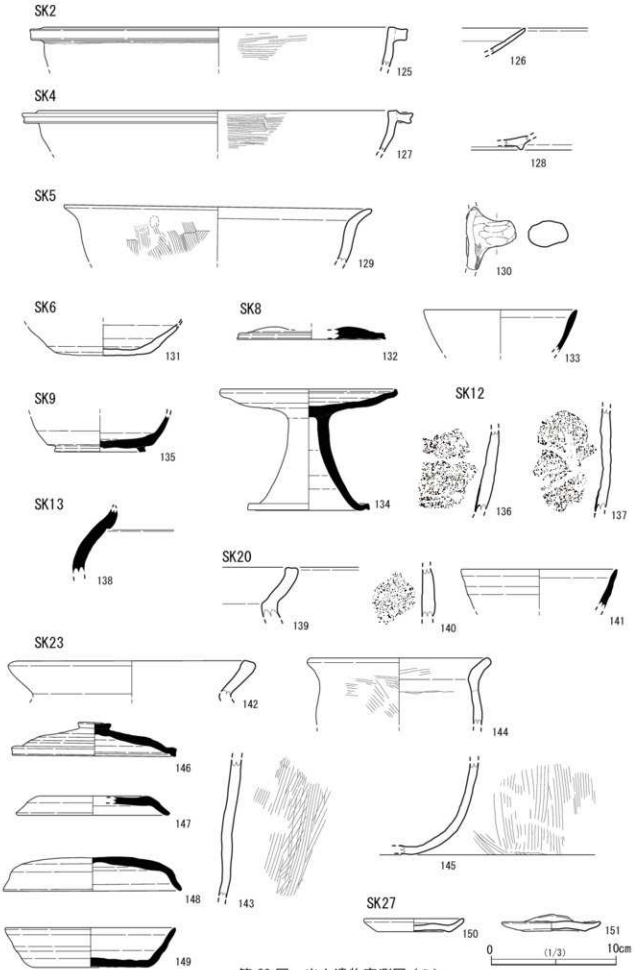
⑪ＳＫ27　150・151は土師器の皿である。体部が開いて短く立ち上がる。151は歪形。

⑫ＳＫ31　184は土師器の杯である。体部は内湾して立ち上がったのち斜め45度に外傾して端部に至る。底部回転糸切り。橙色を呈す。

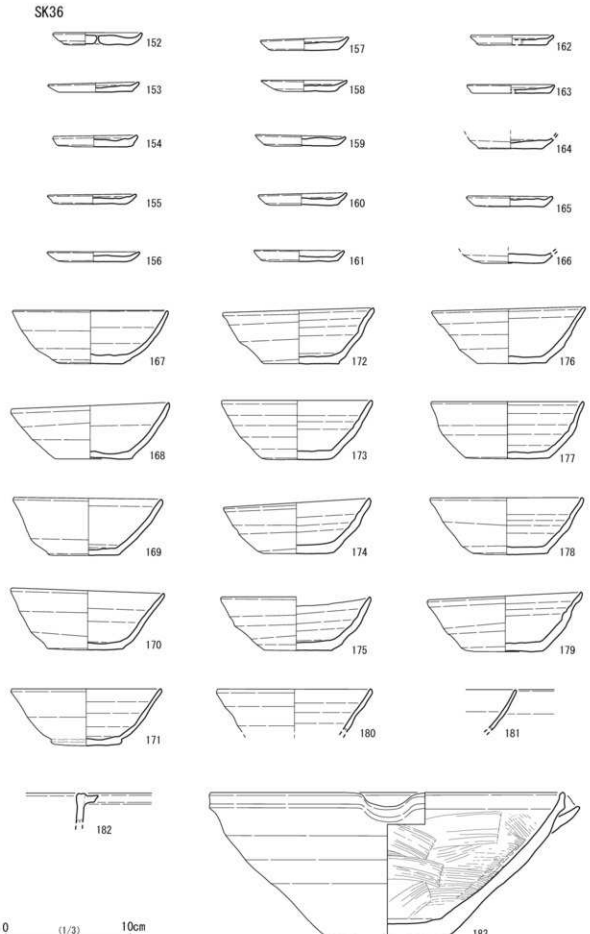
⑬ＳＫ36　152 ～ 166は土師器の皿である。体部は外傾して短く立ち上がり、端部は細めにつまみあげて終わる。口径は6.8 ～ 8.7㎝、器高は0.8 ～ 1.05㎝を測る。167 ～ 181は土師器の杯である。167・168の体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がり端部に至る。169 ～ 179の体部は斜め45度に外傾して立ち上がり口縁下2.2 ～ 3.0㎝のところでわずかに屈曲して口縁端部に至る。口径は11.6 ～ 12.6㎝、器高は4.2 ～ 5.6㎝を測る。周防国府20次SK1315出土の皿・杯(※2)と酷似しており、大内9A式(※3)と同時期のものとみられる。182は土師質土器の羽釜である。183は瓦質土器の捏ね鉢である。注口部を作出する。東播系の写しとみられる。

⑭ＳＫ37　185は土師器の皿である。体部は大きく外傾して短く立ち上がり、端部は丸く収める。

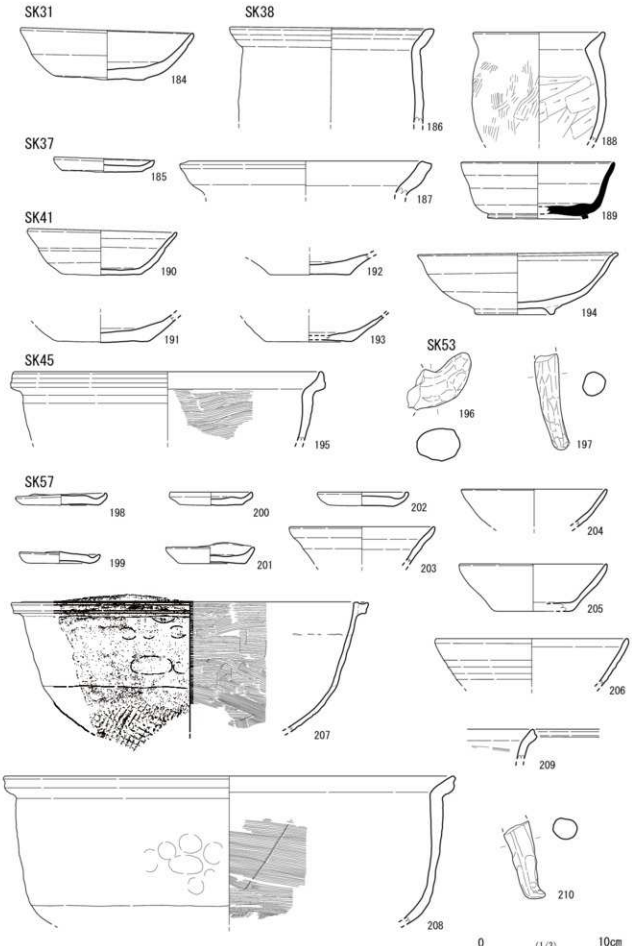
⑮ＳＫ38　186 ～ 188は土師器の甕である。186・187は企救型甕で、口縁端部にしっかりとした平坦面を



第 29 図　出土遺物実測図（8）



第 30 図　出土遺物実測図（9）



第 31 図　出土遺物実測図 (10)

有す。189は須恵器の杯である。断面台形の貼付け高台を有す。体部の立ち上がりは長く、端部はやや外傾する。

⑯ＳＫ41　190 ～ 193は土師器の杯である。190の体部は内湾して立ち上がり、中ほどで外反して口縁端部に至る。外反の境目ははっきりしており稜が立つ。にぶい橙色を呈す。194は土師器の椀である。体部は緩やかに内湾して立ち上がったのち、外反して口縁端部に至る。口径に対して器高は低く、器高係数は3.7である。断面台形の貼付け高台を有す。

⑰ＳＫ45　195は瓦質土器の鍋である。

⑱ＳＫ48　221は姫島産黒曜石製の石鏃である。調整は比較的丁寧。先端部と基部左先端を欠損。

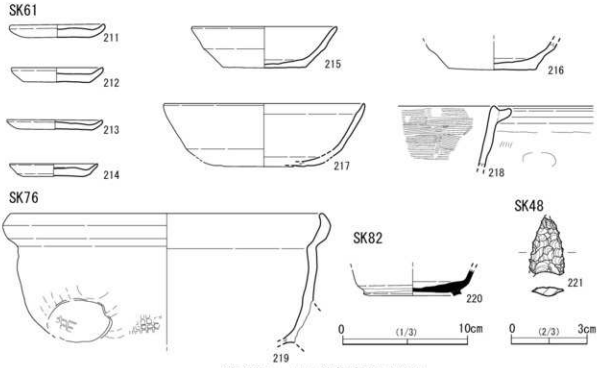
⑲ＳＫ53　196は土師器把手付き甕の把手である。197は瓦質土器足鍋の脚部である。

⑳ＳＫ57　198 ～ 202は土師器の皿である。体部は45度に外傾して内湾気味に短く立ち上がり、端部は丸く収める。203 ～ 206は土師器の杯である。203の体部は45度に外傾して直線的に立ち上がったのち、口縁部は更に外反して端部に至る。204の体部は45度に外傾して内湾気味に立ち上がり、端部に至る。205の体部は60度に外傾して直線的に立ち上がったのち、内湾気味に口縁部を形成し端部に至る。203 ～ 205は橙色を呈す。206の体部は60度に外傾して直線的に立ち上がり、端部に至る。ロクロ目が明瞭に残る。灰白色を呈す。207は土師質土器の羽釜で、断面台形の鍔が高い位置に貼付く。208は瓦質土器の鍋で、肥厚気味の口縁が鋭く外傾する。209は土師質土器の鍋の口縁部で、平坦な口唇中央部に緩やかな凹みを形成する。210は瓦質土器足鍋の脚部で、先端を獣足に疑似形成している。

㉑SK61　211 ～ 214は土師器の皿である。体部は外傾して短く立ち上がり、端部は丸く収める。215 ～ 217は土師器の杯である。218は土師質土器の羽釜である。鍔の位置は高く、端部は丸く収める。

㉒SK76　219は瓦質土器の足鍋である。肥厚気味の口縁部は極端に内湾して端部に至る。

㉓SK82　220は須恵器の杯である。断面長方形の貼付け高台を「ハ」字形に形成する。

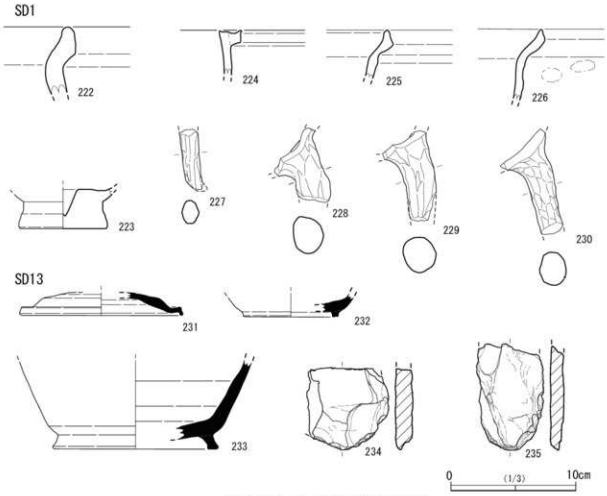


第 32 図　出土遺物実測図 (11)

(5)溝出土遺物(第33図　図版27)

①SD1　222は瓦質土器の甕である。器壁は厚く、口縁部は肥厚ぎみ。体部は内傾して口縁部付近に達したのち外反し、先端は上方向に短く延びて終わる。223は土師器の柱状高台付皿で、皿部を欠損している。内側より穿孔している。穿孔は貫通せず底部1cmのところで止まっており、円錐状を呈する。下右田20次調査SD1280出土高台付皿に酷似する(※4)。224は土師質土器の羽釜である。口縁部付近はやや内湾して端部に至る。鍔は高い位置にあり、水平方向に短く延びたのち上方につまみあげて終わる。225・226は瓦質土器の鍋である。口縁部付近は外反したのち上方向に短くつまみあげて終わる。外面は強めのナデによりロ縁下にくびれを有する。227 ～ 230は瓦質土器の足鍋の脚部である。227は断面径が小さく、先端は獣足を疑似して形成している。228 ～ 230は体部との接合部片で脚部中ほどから先端にかけて欠損している。

②SD13　231は須恵器の杯蓋である。口縁部は短く水平方向に延びたのち下方につまみ出して端部に至る。天井部のつまみの有無は不明。232は須恵器の杯である。断面逆台形状の貼付け高台を有す。高台畳付き部分は平坦である。底面と体部の境は緩やかな屈曲面を呈し、体部はやや外傾して立ち上がる。233は須恵器の壺で、「ハ」字形に貼付け高台を有す。234・235は打製石斧である。234は泥質片岩製で大きめの剥離調整を施す。235は塩基性片岩製で、右刃部の調整は比較的丁寧である。234・235ともに近辺に所在する縄文期の遺跡から流入したものと考えられる。



第 33 図　出土遺物実測図 (12)

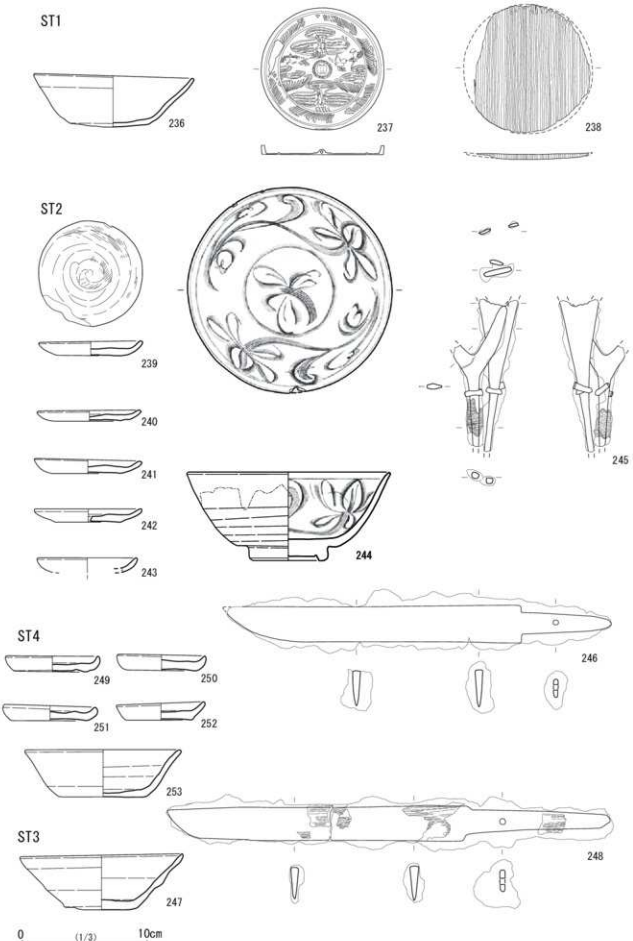
(6)墓出土遺物(第34図　図版28～29)

①ＳＴ１　236は土師器の杯である。体部は45度外傾して直線的に立ち上がり、中ほどから更に外反して口縁端部に至る。一部歪形で、にぶい橙色を呈する。237は銅鏡(和鏡)である。「州浜双雀鏡」で裏面には上下左右に州浜が描かれ、左に松、右に双雀を配している。左右シンメトリーな平安期の配置に絵画的・物語的な要素が加わった構図になっているため、鋳造時期は鎌倉時代まで下ると考えられる。鏡面は丁寧に研きこまれて薄くなっており、鏡背の打ち出し模様も研きによってすり減っている。238は銅鏡を納めていた木製容器(曲げ物)の底板である。杉か檜の上質柾目材で、外側付近の厚みをやや薄めに誂え、反らし気味に形成している。円板形を呈し、銅鏡径に合わせて本体よりやや大きめにつくられている。最大径10.2cm、最大厚0.4cmを測る。

②ＳＴ２　239～243は土師器の皿である。体部は内湾しながら斜め上方に短く立ち上がり、端部は丸く収める。239は内面にロクロ成形時の稜が顕著に残る。240・241の内面中央部分はやや凹む。242は内面から円錐状の焼成前穿孔を有す。いずれの皿も器高は低く、0.8cm～1.1cmを測る。244は青磁椀で、完形である。龍泉窯系Ⅰ類。体部は緩やかに内湾して斜め60度に外傾して立ち上がり、口縁はやや外反して端部に至る。底部はケズリ出し高台を有し、成形は丁寧である。内面と見込み部分に片切り彫りの草花文および劃花文を施す。全釉で、オリーブ灰色の釉薬が均等にかかり、口縁外面にわずかな釉だまりがみられる。245は鉄鏃で、2隻(一手)が癒着した状態で出土した。どちらも狩猟用の野矢のうち雁又式で、鏑矢やそれを継承した流鏑馬などに使われるものである。雁又式鉄鏃は山口市近辺では神郷大塚遺跡Ⅳ SK8－21(※5)の出土例をみる。245のうち1隻は甲矢(はや)もう1隻は乙矢(おとや)と考えられる。2隻を軍事用の征矢の差し添えの矢とし、戦闘開始時の嚆矢(こうや)とすることが知られており、これらが副葬されていたことは当時の儀礼的要素が関係しているものと考えられる。1隻は短頸で鏃身先端の一方を欠損、箆被関(のかつぎまち)以下の茎部には緊縛痕が残る。もう1隻は長頸で鏃身両先端を欠損している。ともに腐食が著しい。246は鉄製の小刀である。両関で目釘穴跡が残る。背関・刃関ともに直角関である。切先をわずかに欠損。残存刀身部長は25.3cm、茎部長は短めで7.7cmを測る。茎部断面中空。腐食が著しく刀身部中央には銹膨れによる大きな塊がみられる。

③ＳＴ３　247は土師器の杯である。体部は斜め45度に開いて直線的に立ち上がり口縁端部に至る。底径は小さめで器高は比較的高い。黄橙色を呈する。248は鉄製の小刀である。両関で目釘穴跡があり、鞘痕が部分的に残る。背関は撫関、刃関は直角関である。刀身部長は24.0cm、茎部長は長めで11.5cmを測る。茎部断面中空。腐食が著しい。

④ＳＴ４　249～252は土師器の皿である。249～251の体部は斜め上方に内湾気味に短く立ち上がり、口縁端部はつまみあげて終わる。252の体部は斜め上方に直線的に短く立ち上がり、口縁端部はやや丸く収める。器高は低めで1.2～1.3cmを測るが、いずれの底部も厚みをもって形成されている。253は土師器の杯である。体部は斜め45度に開いて直線的に立ち上がり、中ほどから更に外反して口縁端部に至る。端部は丸く収める。体部に比べ底面中央の器壁は薄い。249～253の全てが胎土中に赤色の小砂粒(くさり礫)を含み、同じく橙色を呈すことから同じ作り手によって在地で造られたものと考えられる。



第 34 図　出土遺物実測図 (13)

(7)性格不明遺構出土遺物(第35図　図版30)

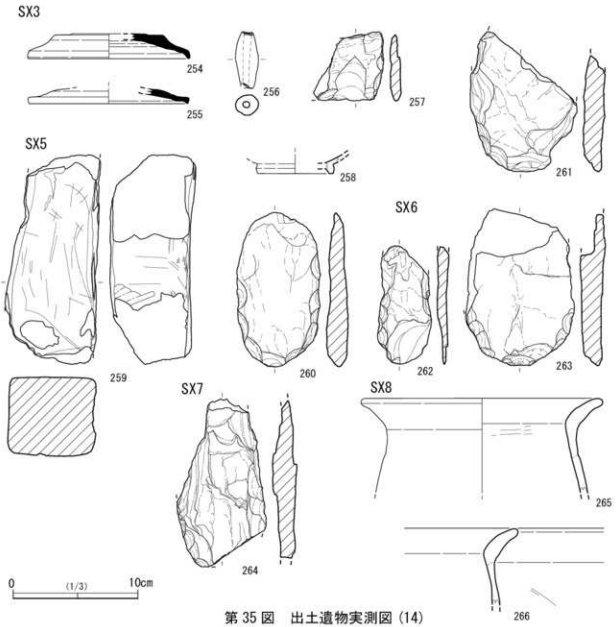
①ＳＸ３　254・255は須恵器の杯蓋である。ともに天井部中央欠損のためつまみの有無は不明。口縁端部は下方につまみ出して終わる。254はヘラケズリにより、ほぼ水平な天井部を形成する。256は土師質焼成の紡錘形の管状土錘である。257は塩基性片岩製の石製品の一部で、石鎌の可能性がある。258は緑釉陶器の椀の底部である。素地は須恵質でケズリ出し高台を有し、京都産である。

②ＳＸ５　259は砂岩製の砥石(中砥)である。3面を使用している。

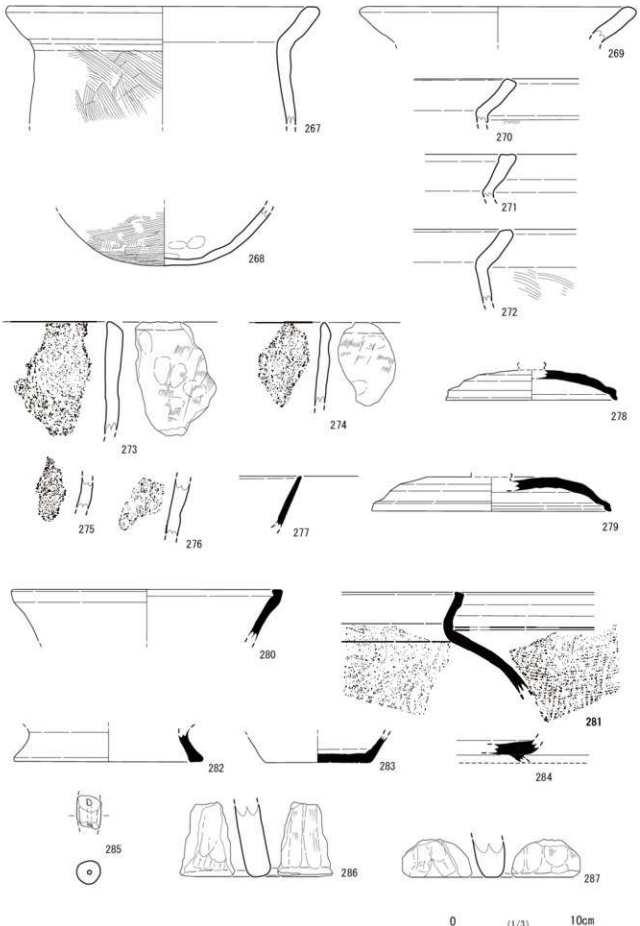
③ＳＸ６　260 ～ 263は塩基性片岩製の打製石斧で、すべて節理に沿って形成されている。262は小型で裏面剥落。刃部左側の調整は比較的丁寧である。263は未製品である。

④ＳＸ７　264は塩基性片岩製の打製石斧である。刃部尖端を欠損。

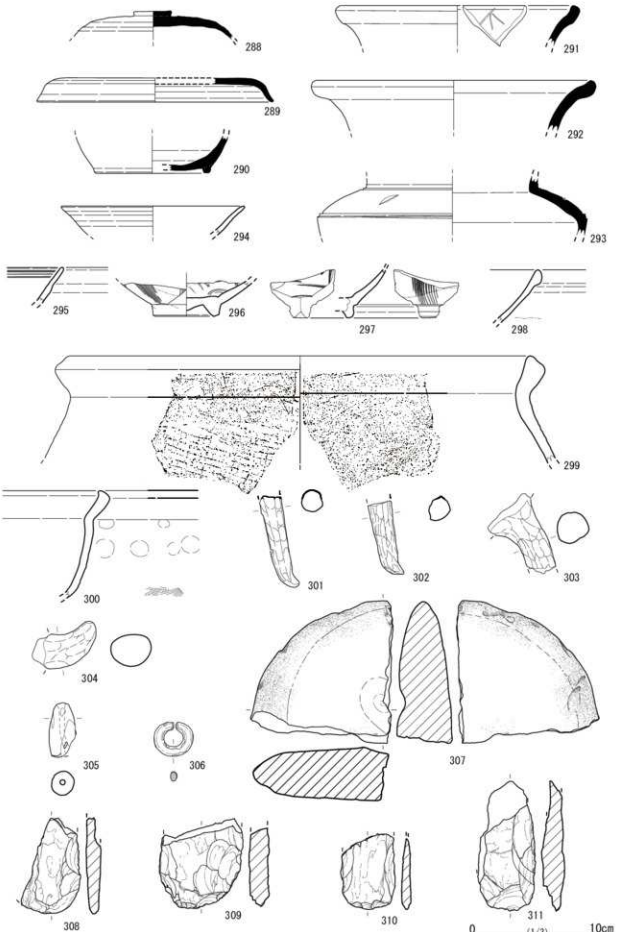
⑤ＳＸ８　265・266は土師器の甕である。ともに胴部は最大径位置からやや内傾して上方に伸び、頸部で大きく外傾して口唇に至る。口縁部は肥厚し、端部は丸く収める。同一個体の可能性がある。内面調整はハケのちナデで、265は微かにハケ目痕が残る。



第 35 図　出土遺物実測図 (14)



第 36 図　出土遺物実測図 (15)



第 37 図　出土遺物実測図 (16)

(8)遺物包含層出土遺物(第36図　図版31～32)

267 ～ 272は土師器で、口縁部に平坦面を有する企救型甕である。273 ～ 276は六連式製塩土器で、内面に布目痕を有す。273・274は口縁部片で、外面にハケ目・指頭圧痕がみられる。277は須恵器の杯である。体部はやや外傾して直線的に立ち上がり口縁端部に至る。立ち上がり部分は長め。278・279は須恵器の杯蓋で、天井部のつまみを欠損。280・281は須恵器の甕である。280は大型で、口縁部は内側に折り込むように形成されている。281の胴部は内湾のち鉛直方向に向きを変え頸部を形成し、更に外反して端部に至る。胴部及び口縁部はほぼ同厚である。282は須恵器の壺である。底部の接地面は平坦である。283・284は須恵器の杯底部である。283は底部ヘラ切りで平底を呈す。284は貼付け高台先端部を欠損。285は土師質焼成の管状土錘である。286・287は円筒状土製品である。内面はケズリのちナデ調整、外面はハケのちナデ調整である。移動式カマド裾部の様な形状であるが、湾曲角度から推定される内径は20cm程度と小さめである。小田浦窯跡群28地点や惣利西遺跡(※6)で類例をみる。

(9)その他の遺物(第36図　図版32～34)

288・289は須恵器の杯蓋で、288はつまみを有す。290は須恵器の杯で、貼付け高台を有す。291 ～ 293は須恵器の壺である。291は内面口縁部下にヘラ状工具による窯印を有す。293は肩部に連続模様の一部とみられるヘラ刻み、頸部に2条、肩部と胴部の境に2～3条の沈線を有す。294 ～ 297は青磁の椀である。296・297は同安窯系椀でケズリ出し高台を有す。296は内外面に櫛描文を施し、297は内面に劃花文、外面に櫛描文を施す。298は白磁の椀で玉縁口縁を有す。299は瓦質土器の甕で内面に同心円状当て具痕、外面に格子目タタキ痕を有す。300は瓦質土器の鍋である。301 ～ 303は瓦質土器の足鍋の脚部で301・302は先端を獣足に疑似して形成している。304は土師器の把手付甕の把手である。305は土師質焼成の紡錘形の管状土錘である。306は銅芯金銅張りの耳環である。表土除去時に遺構密集地のやや東寄り付近で検出したものであるが、今年度調査地においては該当する時期の遺構が確認されておらず、未調査部分あるいは調査地北東部に広がる古墳時代の集落遺構(※7)からの流入の可能性がある。307は流紋岩質凝灰岩製の磨石である。308 ～ 311は塩基性片岩製の打製石斧であり、309を除き未製品。いずれも近辺の縄文期の遺跡から流入したものと考えられる。

参考文献

※1　防府市教育委員会編 2014『周防国府跡船所・浜宮北地区発掘調査報告』
※2　防府市教育委員会編 1982『周防国府20次調査』
※3　北島大輔 2010「IX章 大内式の設定」『大内氏館跡XI』山口市教育委員会
※4　防府市教育委員会編 2002『下右田20次発掘調査報告』
※5　山口市教育委員会編 2007『神郡大塚遺跡IV』山口市埋蔵文化財調査報告 第96集
※6　大野城市教育委員会編 2008『牛頭窯跡群　－総括報告書Ⅰ－』大野城市文化財調査報告書 第77集
※7　山口市教育委員会編 2002「中恋路遺跡第2次調査」『山口市埋蔵文化財年報3』

第2表　出土土器・土製品観察一覧表

棟域	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径(復元値)	底径(復元値)	器高(現存値)	胎土	焼成	色調(内/外)	主な調整(内/外)	備考
22	15	1	S1 1	土師器	甕	(22.4)	－	(3.6)	やや粗	やや良	橙色 橙色	ヨコナデ、ハケタテ ヨコナデ	ロクロ回転右 胎土に0.5～1.0mm大の長石粒を多く含む
22	15	2	S1 1	土師器	甕	－	－	(3.2)	やや粗	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	ナデ ナデ	胎土に微量の長石・くさり礫を含む
22	15	3	S1 1	須恵器	坏身付壺	－	脚部径 (15.6)	(11.6)	やや密	良	灰白色 灰白色	同心円状当て具痕 タタキ後ハケ目、ナデ	外面ハケ後ナデにより肥手付け 胎土に白色砂粒を含む
22	15	4	S1 1	須恵器	高坏	(11.4)	－	(5.3)	やや密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	外面焼き歪み・破損痕有 胎土に2～3mm程度の長石粒を少量含む
22	15	5	S1 1	須恵器	杯	－	－	(3.2)	やや密	良	灰黄色 灰黄色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に2～3mm程度の長石粒を含む
22	15	6	S1 1	須恵器	高坏	－	(6.8)	(6.8)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	
22	15	7	S1 1	土師器	皿	(15.0)	(10.0)	4.7	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ後ミガキ ナデ後ミガキ	黒色顔料被着あり 胎土に雲母・長石・石英・くさり礫を含む
22	15	8	S1 2	土師器	皿	(9.0)	(6.0)	1.9	やや密	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に少量の長石粒を含む
22	15	9	S1 2	白磁	椀	－	－	(2.6)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	内面に2条の沈線
22		10	S1 2	白磁	皿	－	(6.6)	(6.6)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	底部内面に蛇の目釉剥ぎ
22		11	S1 2	青磁	椀	－	－	(4.4)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	外面に鎬連弁
22	15	12	S1 2	瓦質土器	擂鉢	(27.8)	－	(8.6)	やや密	やや良	灰白色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 櫛オサエ、ナデ、ヨコナデ	胎土に長石・石英粒を含む
22	15	13	S1 2	土製品	土錘	長さ(5.6)	径3.0	孔径0.75	やや密	良	灰白色 黄灰色	指圧による形成	紐痕形跡状 胎土に長石粒を含む
23	16	15	SB 2 (SP62)	土師質土器	鍋	(27.0)	－	(11.5)	やや粗	やや良	橙灰色 にぶい橙色	ナデ ハケ目、ナデ	胎土に2mm程度の長石・石英粒を含む 外面に煤・炭化物付着
23		16	SB 2 (SP62)	須恵器	杯	－	－	(2.3)	密	良	灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	
23	16	17	SB10 (SP136)	土師質土器	羽釜	－	－	(4.35)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ後指オサエ	鍔付跡 胎土に少量の長石・雲母を含む
23	16	18	SB16 (SP547)	土師器	杯	14.1	(7.2)	4.3	やや密	不良	にぶい橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転切り 内外面に煤付着
23	16	19	SB19 (SP551)	土師器	杯	13.1	6.1	4.0	やや密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ、ナデ、ミガキ 回転ナデ	底部回転糸切り
23	16	20	SB19 (SP551)	土師器	杯	13.05	6.3	4.0	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ、ミガキ 回転ナデ	底部回転糸切り
23	16	21	SB21 (SP566)	瓦質土器	鍋	－	－	(4.6)	粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色、にぶい黒褐色	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	外面に煤、炭化物付着
23	16	22	SB22 (SP574)	土師器	皿	7.4	5.2	1.3	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 板目圧痕有 ロクロ回転右
23		23	SB22 (SP574)	土師器	皿	(8.8)	(5.6)	1.55	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・石英・くさり礫を含む
23	16	24	SB24 (SP641)	土師器	杯	(11.6)	6.1	3.55	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
23	16	26	SB25 (SP663)	土師器	皿	(8.0)	(5.6)	1.95	やや密	やや良	橙色 橙色	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 板目圧痕有 胎土に1mm程度の長石・くさり礫粒を含む
23	16	27	SB25 (SP663)	瓦質土器	甕	－	－	(5.2)	やや粗	不良	明灰色 明灰色	ナデ ナデ	
23	16	29	SB26 (SP676)	緑釉陶器	皿	－	(5.9)	(1.2)	密	良	胎土：黄灰色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	ケズリ出高台 重ね焼痕跡、貫入有
23	16	29	SB31 (SP1125)	白磁	皿	(11.0)	－	(1.7)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	
23	16	30	SB31 (SP963)	土師質土器	羽釜	－	－	(3.3)	やや密	やや良	明灰色 黒色	ハケ目 ナデ	鍔付跡
23	16	31	SP1293	土師器	椀	－	7.0	(2.6)	密	良	灰白色 浅黄橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後ナデ 鍔付高台
24	16	32	SP712	瓦土器	浅鍋	－	－	(1.8)	やや粗	不良	灰黄褐色 灰黄褐色	ナデ ナデ	黒色顔料土器 渡宋口縁
24	16	33	SP137	土師器	甕	－	－	(2.8)	やや粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ナデ ナデ	金銅型甕
24	16	34	SP30	土師器	甕	－	－	(3.6)	やや粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	不明 ナデ	金銅型甕 2～5mm程度の長石粒を多く含む
24	16	35	SP1134	土師器	甕	(22.5	－	(12.0)	粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ目、ナデ ヨコナデ、ハケ目	
24		36	SP1005	須恵器	杯蓋	(3.0	－	(1.5)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ ナデ	外面被灰

検出区	区画	No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径(現存値)	底径(復元値)	器高(残存値)	胎土	焼成	色調(内)(外)	主な調整(内)(外)	備考
24	16	37	SP1202	須恵器	杯	－	(3.3)	(6.6)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	貼付高台 内面に1条の沈線を有す
24	16	38	SP92	須恵器	杯	－	(9.6)	(2.1)	やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ、ケズリ	底部周縁ヘラ切り 貼付高台 胎土に長石を多く含む
24	16	39	SP94	須恵器	壺	－	(9.2)	(3.3)	やや粗	良	灰色 灰色	回転ナデ ナデ、ケズリ	貼付高台
24	16	40	SP1067	須恵器	壺	－	(7.8)	(1.7)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	貼付高台 長頸壺か
24		41	SP1216	須恵器	壺	－	－	(2.5)	密	良	灰色 灰白色	ナデ ナデ	
24	17	42	SP677	土師器	杯	－	(9.0)	(2.9)	やや密	不良	橙色 にぶい橙	ナデ ナデ	底部周縁ヘラ切り
24	17	43	SP49	土師器	杯	(13.4)	(7.8)	4.2	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 胎土に長石を多く含む
24	17	44	SP49	土師器	杯	－	6.4	(2.6)	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 内外面に煤付着
24	17	45	SP1050	土師器	杯	12.4	6.75	4.2	やや粗	不良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り
24	17	46	SP564	土師器	杯	12.9	6.5	4.2	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 胎土に長石を含む
24	17	47	SP431	土師器	杯	10.9	6.2	3.65	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 内面に煤付着 胎土に長石・石英・くさり礫を含む
24	17	48	SP1264	土師器	杯	11.8	5.4	4.2	密	良	にぶい黄橙色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り ロクロ回転か
24	17	49	SP613	土師器	杯	(14.6)	(6.8)	4.15	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り
24	17	50	SP426	土師器	杯	(13.25)	6.7	3.7	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 胎土に1mm程度の長石・くさり礫粒を含む
24	17	51	SP202	土師器	椀	(16.6)	6.05	4.8	やや粗	不良	灰白色、灰色 灰白色、灰色	回転ナデ後ナデ・ミガキ 回転ナデ、ナデ	貼付高台 一部黒斑を有す
24	17	52	SP144	土師器	椀	－	6.8	(2.3)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい橙色	回転ナデ後ミガキ 回転ナデ	貼付高台 高台は角丸の三角形を呈す
25	17	53	SP022	土師器	皿	6.6	5.6	0.9	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り ロクロ回転か
25		54	SP141	土師器	皿	(6.8)	(5.4)	1.15	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 全体煤跡 胎土に長石・くさり礫を含む
25	17	55	SP141	土師器	皿	(6.6)	(5.6)	1.0	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 一部黒斑有す 胎土に長石・くさり礫を含む
25	17	56	SP1016	土師器	皿	7.2	6.4	1.1	やや密	やや良	にぶい黄橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り ロクロ回転か
25	17	57	SP779	土師器	皿	7.6	5.6	1.9	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り ロクロ回転か 胎土にくさり礫を含む
25	17	58	SP819	土師器	皿	7.6	5.1	1.4	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り ロクロ回転か 胎土に0.5～1.0mmの長石粒を含む
25	17	59	SP1143	土師器	皿	7.8	6.7	1.3	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 板目圧痕有 ロクロ回転か
25	17	60	SP869	土師器	皿	6.4	6.0	1.0	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り、ロクロ回転か 一部黒斑、煤跡 胎土にくさり礫を含む
25	17	61	SP99	土師器	皿	6.8	5.8	0.9	やや密	良	灰黄褐色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 板目圧痕有
25	17	62	SP99	土師器	皿	7.1	6.3	0.7	やや密	やや良	橙色 明赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 胎土に光沢のある鉱物を含む
25	17	63	SP348	土師器	皿	6.1	5.8	0.8	密	やや良	橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 全体煤跡
25	17	64	SP46	土師器	皿	6.9	5.2	1.1	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 一部黒斑を有す 胎土に長石・石英を含む
25	17	65	SP801	土師器	皿	8.0	5.7	1.0	やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り ロクロ回転か 胎土に1～2mmの石英粒を多く含む
25	17	66	SP1108	土師器	皿	6.95	3.7	0.9	やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 板目圧痕有
25	17	67	SP1111	土師器	皿	(7.7)	(5.1)	1.2	やや密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 板目圧痕有
25	17	68	SP1110	土師器	皿	10.15	5.0	1.95	やや密	やや良	浅黄橙色、黄灰色 にぶい黄橙色、黄灰色	回転ナデ、ナデ 外面に煤付着	底部周縁未切り 外面に煤付着
25	17	69	SP1111	土師器	皿	(11.6)	4.8	2.3	やや密	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 板目圧痕有 内面に煤付着
25	17	70	SP815	土師器	皿	(12.0)	5.2	2.5	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部周縁未切り 胎土に長石・くさり礫を含む
25	17	71	SP348	土師器	杯	(16.0)	－	(3.6)	やや密	良	浅黄色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に黒色砂粒・くさり礫を含む

棒域	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)			粘土	焼成	色調(内/外)	主な調整(内/外)	備考
						口径(復元値)	底径(復元値)	器高(残存値)					
25	17	72	SP1258	土師器	柱状高台付椀	－	(7.4)	(2.1)	密	やや良	橙色 橙色	ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
25	18	73	SP1061	緑釉陶器	皿	－	－	(1.9)	密	良	胎土：黄灰 釉：灰オリーブ	回転ナデ 回転ナデ	重焼痕跡 京都産
25	18	74	SP1045	緑釉陶器	椀	－	(5.8)	(1.75)	密	良	胎土：浅黄橙色 釉：浅黄色	回転ナデ 回転ナデ	内外面の強釉掛に焼色の残存又有 重焼上痕跡 貼付高台，関西産
25	18	75	SP174	青磁	椀	－	5.7	(4.2)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	畿東窯系 クズリ出高台，金輪 内面見込みに刻花文
25	18	76	SP861	青磁	椀	－	－	(3.5)	密	良	胎土：灰白色 釉：明緑灰色	回転ナデ 回転ナデ	畿東窯系椀B1類 蛇蛇少
25	18	77	SP868	青磁	椀	－	－	(2.5)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	畿東窯系 外面に蛇蛇少
25	18	78	SP730	青磁	椀	－	－	(3.0)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ，ナデ 回転ナデ，ナデ	同安窯系椀I類 内面口縁部下に1条沈線 外面に櫛歯文有
25	18	79	SP620	白磁	皿	－	－	(1.9)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
25	18	80	SP639	白磁	椀	－	－	(3.4)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	内面に1条の沈線
25	18	81	SP648	白磁	椀	－	－	(2.0)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	玉縁口縁
25	18	82	SP575	白磁	椀	－	－	(2.1)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	玉縁口縁
25	18	83	SP819	白磁	椀	(16.0)	－	(2.5)	密	良	胎土：灰白色 釉：－	回転ナデ 回転ナデ	釉掛失
25	18	84	SP596	白磁	椀	(16.6)	－	(5.25)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	内面に2条の沈線
25	18	85	SP178	白磁	椀	－	6.0	(2.7)	密	良好	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	クズリ出高台 高台部分露胎
26	18	86	SP201	土師質土器	羽釜	(20.8)	－	(7.40	やや粗	不良	明灰色 明灰色	ハケ目 コロナデ，指オサエ，ナデ	貼付鍔 複数のハケ原体を使用
26	18	87	SP189	瓦質土器	羽釜	－	－	(6.1)	やや密	やや良	灰色 灰色	ハケ目，コロナデ，指オサエ ナデ	貼付鍔 内面に煤ごぼれ痕を有す
26	18	88	SP420	瓦質土器	羽釜	25.4	－	(3.1)	やや密	やや良	灰色 灰色	ナデ ナデ	貼付鍔
26	18	89	SP419	土師質土器	羽釜	－	－	(2.6)	やや密	やや良	灰黄色 黒色	ハケ目 ナデ	貼付鍔
26	19	90	SP1310	瓦質土器	羽釜	(30.6)	－	(8.7)	やや密	やや良	黒褐色 黒色	ハケ目後ナデ，指オサエ ハケ目後ナデ，指オサエ	貼付鍔 ハケ目単位10本か
26	19	91	SP862	瓦質土器	羽釜	－	－	(4.6)	やや粗	不良	灰黄褐色 灰黄褐色	ハケ目 コロナデ	貼付鍔
26	19	92	SP203	土師質土器	羽釜	－	－	(2.7)	やや密	やや良	黄灰色 灰黄色	ナデ ナデ	貼付鍔
26	19	93	SP684	瓦質土器	羽釜	(35.0)	－	(10.6)	やや粗	やや良	灰黄褐色 にぶい橙色，灰黄褐色	ハケ目，ナデ コロナデ，指オサエ，ナデ，ハケ目	貼付鍔 外面に煤・固化物付着 複数のハケ原体を使用
27	19	94	SP1111	瓦質土器	鍋	(28.8)	－	(11.2)	やや粗	やや良	にぶい黄橙色，褐灰色 にぶい橙色	コロナデ，ナデ，ハケ目 コロナデ，ナデ，指オサエ，タタキ	外面格子目タタキ 内面に煤付着
27	19	95	SP523	瓦質土器	鍋	－	－	(5.2)	やや粗	不良	褐灰 灰黄褐色，黒褐色	コロナデ コロナデ，指オサエ，ハケ後ナデ	外面に煤付着
27	19	96	SP429	土師質土器	鍋	－	－	(5.7)	やや粗	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	コロナデ，ナデ コロナデ，ナデ	胎土に1～2mm程度の長石・石英粒を含む
27	19	97	SP682	瓦質土器	鍋	(43.6)	－	(16.3)	やや粗	やや良	橙色 にぶい橙色，黒褐色	コロナデ，ナデ コロナデ，指オサエ，ナデ	外面に煤付着
27	19	98	SP527	瓦質土器	鍋	－	－	(4.6)	やや粗	不良	にぶい黄褐色，褐灰色 灰黄褐色，黒褐色	コロナデ，ナデ コロナデ，ナデ	外面に煤付着
27	19	99	SP864	瓦質土器	鍋	(39.2)	－	14.9	粗	不良	にぶい黄褐色，灰黄褐色 灰黄褐色，黒褐色	コロナデ，指オサエ，ナデ コロナデ，指オサエ，タタキ後ナデ	外面は正金体に煤付着
27		100	SP709	土師質土器	鍋	－	－	(3.1)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 灰黄褐色	ナデ ナデ	胎土に0.5～1.0mm程度の長石・石英粒を少量含む
27	19	101	SP1010	瓦質土器	鍋	－	－	(3.3)	やや密	やや良	灰色 黒色	ナデ ナデ	
27	19	102	SP1156	瓦質土器	鍋	(32.0)	－	(7.3)	やや密	やや良	灰色 黒色	ハケ目，ナデ ナデ	外面に煤付着
27	20	103	SP796	瓦質土器	足鍋(脚)	－	－	(10.9)	やや密	やや良	にぶい橙色	削出による形成	脚足
27	20	104	SP415	土師質土器	足鍋(脚)	－	－	(6.4)	やや密	やや良	灰白色，浅黄橙色	削出による形成	脚足 1mm程度の長石・石英粒を多く含む
27	20	105	SP429	瓦質土器	足鍋(脚)	－	－	(9.5)	やや密	やや良	灰白色	削出による形成	脚上に長石粒を含む
27	20	106	SP856	瓦質土器	足鍋(脚)	－	－	(15.6)	粗	やや良	浅黄橙色	削出による形成	脚上に長石・石英を多く含む

棟区	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径(現存値)	底径(復元値)	器高(現存値)	胎土	焼成	色調(内)(外)	主な調整(内)(外)	備考
29	20	107	SP200	五筒土器	足鍋(脚)	－	－	(15.3)	やや密	やや良	黒色 灰黄色	指頭による形成	一部黑斑を有す
29	20	108	SP1111	五筒土器	足鍋(脚)	－	－	(6.7)	やや密	やや良	黒色 にぶい橙色	指頭による形成	
29	20	109	SP632	五筒土器	足鍋(脚)	－	－	(7.6)	粗	不良	にぶい黄橙色、にぶい橙色	指頭による形成	
29	20	110	SP225	五筒土器	足鍋(脚)	－	－	(5.3)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 灰黄褐色	指頭による形成	胴部との接合付近に煤付着
29	20	111	SP491	土師質土器	焙烙	(10.6)	(10.6)	7.5	やや密	やや良	にぶい黄橙色、橙色 にぶい黄橙色、橙色	ハケ目、ナデ ケズリ、ナデ	
29	20	112	SP636	五筒土器	焙鍋	－	－	(4.6)	やや密	やや良	灰黄褐色、黒褐色 にぶい褐色、黒褐色	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目	内外面に煤付着
29		113	SP632	五筒土器	焙鍋	－	－	(2.6)	やや密	やや良	灰白色 にぶい黄褐色	ナデ、指頭 ハケ後ナデ	一部黑斑を有す
29	20	114	SP370	五筒土器	甕	－	－	(10.5)	やや粗	やや良	灰白色 灰黄色	ナデ タタキ後ナデ	
29	20	115	SP228	五筒土器	甕	(36.6)	－	(16.2)	やや粗	不良	にぶい黄橙色 赤橙色	ナデ タタキ後ナデ	口縁部内面に煤付着有す
29	20	116	SP910	土製品	土錘	長さ(2.5)	径1.0	孔径0.5	粗	不良	明灰色	指頭による形成	管状
29	20	117	SP1010	土製品	土錘	長さ4.15	径1.8	孔径0.5	やや粗	やや良	明灰色	指頭による形成	管状
29	21	125	SK 2	土師質土器	羽釜	(27.6)	－	(3.1)	やや粗	やや良	明灰色 明灰色	ハケ目、ヨコナデ ヨコナデ	鍔付羽
29	21	126	SK 2	白磁	皿	－	－	(2.6)	密	良	紫上：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	内面に1条の沈線
29	21	127	SK 4	土師質土器	羽釜	(28.4)	－	(3.3)	やや粗	不良	灰黄褐色 明灰色	ハケ目、ヨコナデ ヨコナデ	鍔付羽 鍔部に沈線状の凹み
29		128	SK 4	土師器	鍋	－	－	(3.1)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 黄灰色	回転ナデ ナデ	鍔付造台
29	21	129	SK 5	土師器	甕	(24.4)	－	(4.2)	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ハケ後ナデ	一部黑斑を有す 粘土に長石粒を多く含む No. 130と同一個体か
29	21	130	SK 5	土師器	把手付甕(把手)	－	－	(5.6)	やや粗	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ 指オサエ、ハケ後ナデ	粘土に長石粒を多く含む No. 129と同一個体か
29	21	131	SK 6	土師器	杯	－	(7.6)	2.45	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	底部糸切り 全体摩耗 粘土に1mm程度の長石粒を含む
29	21	132	SK 8	須恵器	杯蓋	(11.7)	－	(0.95)	やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	粘土に黑色砂粒を含む 口縁部外面に凹線
29		133	SK 8	須恵器	杯	(12.6)	－	(3.6)	やや密	やや良	灰白色 灰黄色	回転ナデ 回転ナデ	
29	21	134	SK 8	須恵器	高坏	(13.8)	(9.6)	9.6	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ、脚部内へラケズリ 回転ナデ、ナデ	
29	21	135	SK 9	須恵器	杯	－	(7.2)	(2.6)	やや粗	良	灰白色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り 鍔付造台
29	21	136	SK12	土師器	製塩土器	－	－	(6.5)	粗	不良	灰黄褐色 灰褐色	布目痕 ナデ	八連式
29	21	137	SK12	土師器	製塩土器	－	－	(8.1)	粗	不良	灰黄褐色 にぶい黄橙色	ハケ目、布目痕 ナデ	八連式
29	21	138	SK13	須恵器	壺	－	－	(5.1)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	1条の沈線
29	21	139	SK20	土師器	甕	－	－	(3.6)	粗	不良	にぶい褐色 にぶい黄橙色	ナデ ナデ	金物型整
29	21	140	SK20	土師器	製塩土器	－	－	(3.6)	粗	不良	にぶい褐色 橙色	布目痕 調整不明	八連式
29		141	SK20	須恵器	杯	(12.4)	－	(3.2)	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
29	21	142	SK23	土師器	甕	－	－	(2.85)	粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	金物型整
29	21	143	SK23	土師器	甕	－	－	(16.9)	粗	不良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ ハケ目	金物型整
29	22	144	SK23	土師器	甕	(14.0)	－	(5.4)	粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	粘土に長石・石英・雲母を多く含む No. 145と同一個体か
29	22	145	SK23	土師器	甕	－	－	(7.2)	粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ目、ナデ ハケ目	粘土に長石・石英・雲母を多く含む No. 144と同一個体か
29	22	146	SK23	須恵器	杯蓋	(12.6)	－	2.65	やや密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、天井部ヘラケズリ	粘土に長石・黑色砂粒を含む ロクロ回転左
29	22	147	SK23	須恵器	杯蓋	(12.0)	天井部径8.6	(1.55)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	
29	22	148	SK23	須恵器	杯蓋	14.8	－	2.6	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	ロクロ回転左

棟域	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径(復元値)	底径(復元値)	器高(現存値)	胎土	焼成	色調(内)(外)	主な調整(内)(外)	備考
29	22	149	SK23	須恵器	杯	(13.4)	(6.2)	3.15	やや密	良	黄灰色 黄灰色	回転ケズリ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り
29	22	150	SK27	土師器	皿	(7.7)	5.8	1.1	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り ロクロ回転台
29	22	151	SK27	土師器	皿	7.7	5.0	1.35	やや粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	0.4mm金雲母
30	23	152	SK36	土師器	皿	7.1	5.3	0.95	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り後微成形痕有 胎土に くさり礫を含む
30	23	153	SK36	土師器	皿	7.2	5.9	0.8	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
30	23	154	SK36	土師器	皿	6.8	5.9	0.9	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ、指オサエ	底部回転糸切り 胎土に くさり礫・長石を含む
30	23	155	SK36	土師器	皿	7.15	5.9	0.8	やや密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 0.5～1.0mm程度の長石粒・雲母を多く含む
30	23	156	SK36	土師器	皿	6.7	5.2	0.8	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・雲母を含む
30	23	157	SK36	土師器	皿	6.3	5.2	1.05	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・黒色砂粒を多く含む
30	23	158	SK36	土師器	皿	6.8	4.5	0.9	やや密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に くさり礫を含む
30	23	159	SK36	土師器	皿	7.2	5.9	0.9	やや密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・雲母・くさり礫を含む
30	23	160	SK36	土師器	皿	7.1	5.4	1.0	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・くさり礫を含む
30		161	SK36	土師器	皿	7.15	6.1	0.9	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
30		162	SK36	土師器	皿	(6.6)	(5.2)	0.8	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
30	23	163	SK36	土師器	皿	(7.0)	(6.2)	0.7	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石を多く含む
30	23	164	SK36	土師器	皿	—	5.1	1.05	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 一部黒雲母有り 胎土に雲母を含む
30	23	165	SK36	土師器	皿	6.85	5.4	0.85	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に くさり礫を含む
30	23	166	SK36	土師器	皿	—	5.5	0.9	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・石英・くさり礫を含む
30	23	167	SK36	土師器	杯	12.4	5.0	4.2	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に金雲母・くさり礫を含む
30	23	168	SK36	土師器	杯	12.6	6.1	4.45	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切り
30	23	169	SK36	土師器	杯	11.8	4.6	5.6	密	良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切り 外面に煤付着
30	23	170	SK36	土師器	杯	12.2	6.0	4.9	密	やや良	にぶい橙色、橙色 にぶい橙色、橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 一部黒雲母有り 胎土に金雲母を含む
30	23	171	SK36	土師器	杯	(12.0)	5.6	4.5	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に雲母を含む
30	23	172	SK36	土師器	杯	12.1	6.15	4.4	やや粗	やや良	橙色、灰白色 橙色、灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・くさり礫を含む
30	24	173	SK36	土師器	杯	(12.0)	5.6	4.7	やや粗	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 全体煤跡 胎土に長石・くさり礫を含む
30	24	174	SK36	土師器	杯	11.6	6.0	4.4	やや粗	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・くさり礫を含む
30	24	175	SK36	土師器	杯	12.0	5.4	4.25	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に2～3mmの砂粒を含む 0.4mm金雲母
30	24	176	SK36	土師器	杯	12.15	5.6	4.5	密	良	橙色、にぶい黄色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
30	24	177	SK36	土師器	杯	(12.4)	6.6	4.5	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ、コツコツナデ	底部回転糸切り 粗方圧痕有 胎土に長石・くさり礫を含む
30	24	178	SK36	土師器	杯	12.2	5.9	4.5	やや粗	不良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 全体煤跡 胎土に長石・くさり礫を含む
30	24	179	SK36	土師器	杯	12.4	5.9	4.7	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	底部回転糸切り 内面に煤付着
30		180	SK36	土師器	杯	(12.2)	—	(3.4)	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	胎土にくさり礫を含む
30		181	SK36	土師器	杯	—	—	(3.2)	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に光沢のある鉱物を含む
30	24	182	SK36	土師質土器	羽釜	—	—	(2.35)	やや粗	やや良	浅黄色 浅黄色	ナデ ナデ	鍔付羽 胎土に長石を多く含む
30	24	183	SK36	瓦質土器	焙烈鉢	(28.0)	9.0	11.5	やや密	良	灰白色 灰白色	ナデ後ハケ目 ナデ	底部回転糸切り 粗方圧痕有

棟図	図版	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調(内)(外)	主な調整(内)(外)	備考
						口径(現存値)	底径(復元値)	器高(残存値)					
31	22	184	9K31	土師器	杯	13.6	7.1	4.1	やや密	不良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転右 全体摩滅 胎土に長石・くさり礫を含む
31	22	185	9K37	土師器	皿	8.0	6.4	1.2	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に少量の長石・くさり礫を含む
31	22	186	9K38	土師器	甕	(16.2)	—	(7.5)	粗	不良	黒色 橙色	ナデ、ヨコナデ ナデ、ヨコナデ	全体摩滅 一部黒斑を有す 胎土に1mm程の長石・石英・くさり礫粒を含む
31	22	187	9K38	土師器	甕	(20.0)	—	(2.7)	粗	不良	明赤褐色 明赤褐色	ナデ ナデ	全体摩滅 胎土に1～2mmの石英・長石粒を多く含む 一部黒斑を有す
31	22	188	9K38	土師器	甕	(10.6)	—	(9.7)	やや粗	不良	褐灰色 にぶい赤褐色	ヘラケズリ後ナデ ハケ後ナデ	全体摩滅 一部黒斑を有す
31	22	189	9K38	須恵器	杯	(12.2)	(8.0)	4.5	やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り 貼付高台
31	22	190	9K41	土師器	杯	(11.6)	6.3	3.3	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
31	22	191	9K41	土師器	杯	—	7.4	(2.2)	やや密	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 粉吹状痕有
31	22	192	9K41	土師器	杯	—	6.3	(1.6)	やや粗	不良	橙色 橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・石英・雲母・くさり礫を含む
31	22	193	9K41	土師器	杯	—	6.9	(2.1)	やや密	不良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土にくさり礫を含む
31	22	194	9K41	土師器	椀	15.7	6.3	5.8	やや密	不良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	丁寧ナデ 内外面に黒斑を有す	貼付高台 内外面に黒斑を有す
31	25	195	9K45	五筒土器	鍋	(24.2)	—	(5.4)	やや粗	良	灰白色 灰白色	ナデ、ハケ目 ナデ	外面に炭化物付着 胎土に不純を含む
31	25	196	9K51	土師器	把手付甕(把手)	—	—	(6.8)	やや粗	やや良	浅黄橙色	指頭による形成	胎土に長石・石英・褐色砂粒を含む
31	25	197	9K51	五筒土器	足鍋(脚)	—	—	(7.6)	やや密	やや良	灰白色	指頭による形成	胎土に不純を含む
31	25	198	9K57	土師器	皿	7.05	6.0	6.8	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・雲母を含む
31	25	199	9K57	土師器	皿	9.35)	5.1	6.9	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石粒を含む
31	25	200	9K57	土師器	皿	(6.4)	(5.0)	1.0	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・くさり礫を含む
31	25	201	9K57	土師器	皿	6.9	5.3	1.3	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
31	25	202	9K57	土師器	皿	(7.0)	5.3	1.1	やや粗	やや良	にぶい褐色 にぶい褐色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
31	25	203	9K57	土師器	杯	(11.4)	—	(3.05)	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	
31	25	204	9K57	土師器	杯	(11.4)	—	(3.0)	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に長石・石英を含む
31	25	205	9K57	土師器	杯	(11.6)	(6.2)	3.8	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	胎土に長石・石英・雲母を含む
31	25	206	9K57	土師器	杯	(15.2)	—	(3.75)	やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
31	25	207	9K57	土師質土器	羽釜	(26.6)	—	(10.3)	やや密	良	灰白色 灰黄褐色	ハケ目 ヨコナデ、指オサエ、格子目タタキ	貼付鍔
31	25	208	9K57	五筒土器	鍋	(35.4)	—	(11.8)	やや粗	やや良	褐灰色 黒褐色	ハケ目 ヨコナデ、ナデ、格子目タタキ、 ハケ目、指オサエ	
31		209	9K57	土師質土器	鍋	—	—	(2.3)	粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ後ナデ ナデ	胎土に長石・不純を含む
31	25	210	9K57	五筒土器	足鍋(脚)	—	—	(6.2)	やや密	良	褐灰色	指頭による形成	脚部 胎土に不純・黒色砂粒を含む
32	26	211	9K61	土師器	皿	7.4	5.5	1.6	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 粉吹状痕有 胎土に長石を含む
32	26	212	9K61	土師器	皿	(7.15)	5.2	1.15	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・くさり礫を含む
32	26	213	9K61	土師器	皿	7.45	5.95	0.7	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・雲母を含む
32	26	214	9K61	土師器	皿	(7.6)	(4.8)	1.0	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土にくさり礫・長石・雲母を含む
32	26	215	9K61	土師器	杯	(11.3)	(6.6)	3.3	やや密	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石粒を含む
32	26	216	9K61	土師器	杯	—	6.9	(2.2)	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土に長石・雲母・くさり礫を含む
32	26	217	9K61	土師器	杯	(15.6)	(8.4)	5.6	やや密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ後ミガキ 回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り 胎土に不純・くさり礫を含む
32	26	218	9K61	土師質土器	羽釜	—	—	(4.7)	やや粗	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	ハケ目 ヨコナデ、ハケ目、指オサエ、ナデ	貼付鍔 胎土に長石・不純を含む

棒区	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径(復元径)	底径(復元径)	器高(現存値)	胎土	焼成	色調(内/外)	主な調整(内/外)	備考
32	26	219	SK76	灰質土器	足鍋	(24.6)	－	(10.10)	やや粗	不良	にぶい黄橙色、褐灰色 にぶい黄橙色、褐灰色	ヨコナデ ヨコナデ、ナデ、格子目タタキ	格子目タタキ痕顕微鏡観察
32	26	220	SK62	須恵器	杯	－	7.7	(2.13)	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ、ナデ	貼付高台 胎土に黒色砂粒を含む
33	27	222	SD 1	灰質土器	甕	－	－	(5.3)	やや密	やや良	灰色 灰色	ナデ ナデ	口縁部彫深後丁寧なヨコナデ
33	27	223	SD 1	土師器	柱状高台付椀	－	6.8	(3.2)	やや密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 内面から穿孔後固形充填す
33	27	224	SD 1	土師質土器	羽釜	－	－	(5.5)	密	良	灰褐色 灰黄褐色	ナデ ナデ	貼付脚
33	27	225	SD 1	灰質土器	鍋	(34.4)	－	(3.7)	やや密	やや良	灰白色 灰白色	ナデ ナデ	
33	27	226	SD 1	灰質土器	鍋	(32.0)	－	(3.6)	やや粗	不良	にぶい黄橙色 灰白色	ナデ ナデ、指オサエ	
33	27	227	SD 1	灰質土器	足鍋(脚)	－	－	(4.6)	やや密	やや良	灰色	指頭による形成	脚部
33	27	228	SD 1	灰質土器	足鍋(脚)	－	－	(5.6)	やや密	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ 指頭による形成	
33	27	229	SD 1	灰質土器	足鍋(脚)	－	－	(7.0)	やや密	やや良	灰黄褐色 にぶい黄橙色	ナデ 指頭による形成	
33	27	230	SD 1	灰質土器	足鍋(脚)	－	－	(7.3)	やや密	やや良	灰色 褐灰色	指頭による形成	
33	27	231	SD13	須恵器	杯蓋	(12.6)	天井部径(9.2)	1.8	やや密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ	胎土に石英・長石・黒色砂粒を含む
33	27	232	SD13	須恵器	杯	－	(7.6)	(1.9)	やや密	良	灰色 灰色	ナデ 回転ナデ、ナデ	貼付高台
33	27	233	SD13	須恵器	壺	－	(17.2)	(7.4)	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	貼付高台 ロクロ回転台 胎土に黒色砂粒を含む
34	28	236	ST 1	土師器	杯	12.5	6.2	4.05	やや粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 指押圧痕有 ロクロ回転台
34	28	239	ST 2	土師器	皿	8.05	5.8	1.1	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ハケ目、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 指押圧痕 ロクロ回転台
34	28	240	ST 2	土師器	皿	8.0	6.15	0.8	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
34	28	241	ST 2	土師器	皿	8.2	5.6	1.1	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り
34	28	242	ST 2	土師器	皿	(8.4)	(5.2)	1.1	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部中央に焼成前穿孔 底部回転糸切り ロクロ回転台
34		243	ST 2	土師器	皿	(7.8)	－	(0.7)	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	
34	28	244	ST 2	青磁	鉢	16.2	5.6	7.0	密	良	胎土：灰白色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	龍泉窯Ⅱ類 ケズリ出高台、金輪 内面見込みに片切り線りの草花文・蓮花文
34	28	247	ST 3	土師器	杯	13.0	5.7	4.4	やや密	やや良	黄橙色 黄橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 一部黒斑を有す 胎土に長石・くさり礫を含む
34	28	249	ST 4	土師器	皿	7.2	5.05	1.2	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 指押圧痕有 胎土にくさり礫を含む
34	28	250	ST 4	土師器	皿	8.05	5.7	1.2	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転台 指押圧痕有 胎土にくさり礫を含む
34	28	251	ST 4	土師器	皿	7.2	6.0	1.2	やや粗	やや良	橙色 橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り、ロクロ回転台 胎土にくさり礫を含む
34	28	252	ST 4	土師器	皿	6.9	5.3	1.3	やや密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土にくさり礫を含む
34	28	253	ST 4	土師器	杯	12.1	6.9	3.7	やや粗	不良	橙色 橙色	回転ナデ後ナデ 回転ナデ	底部回転糸切り 胎土にくさり礫を含む
35		254	SX 3	須恵器	杯蓋	(12.6)	天井部径(8.6)	2.0	やや密	やや良	灰色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ
35		255	SX 3	須恵器	杯蓋	(12.6)	天井部径(8.4)	1.2	やや密	やや良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	天井部回転ヘラケズリ
35	30	256	SX 3	土製品	土錘	長3.4.5	径1.8	孔径0.5	やや粗	やや良	浅黄橙色	指頭圧痕形成	紐痕圧跡状
35		258	SX 5	緑釉陶器	椀	－	(6.0)	(1.5)	密	良	胎土：灰色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ ケズリダシ	黒笹窯産製 京都系
35	30	265	SX 8	土師器	甕	(16.4)	－	(7.5)	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ後ナデ ヨコナデ、ナデ	No. 266と同一個体か
35	30	266	SX 8	土師器	甕	－	－	(6.1)	粗	不良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ後ナデ ナデ	No. 265と同一個体か
36	31	267	遺物包含層	土師器	甕	(24.4)	－	(9.3)	やや粗	やや良	明褐色 明褐色	ケズリ後ナデ、ナデ ハケ目、ナデ	金輪型甕 No. 268と同一個体か
36	31	268	遺物包含層	土師器	甕	－	(16.6)	(4.7)	やや粗	やや良	明褐色 明褐色	ケズリ後ナデ、指オサエ ハケ目	金輪型甕 胎土に0.5～3mm程度の長石粒を多く含む No. 267と同一個体か

時代	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径(現存値)	底径(復元値)	器高(残存値)	胎土	焼成	色調(内)(外)	主な調整(内)(外)	備考
36	31	269	遺物包含層	土師器	甕	(20.4)	—	(2.6)	粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ヨコナデ ヨコナデ	金銅製甕
36	31	270	遺物包含層	土師器	甕	—	—	(2.6)	粗	不良	灰黄褐色 にぶい黄橙色	ヨコナデ ヨコナデ、ハケ目	金銅製甕
36	31	271	遺物包含層	土師器	甕	—	—	(3.4)	やや粗	やや良	明褐色 明赤褐色	ナデ ナデ	金銅製甕
36	31	272	遺物包含層	土師器	甕	—	—	(5.6)	粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ハケ目	金銅製甕
36	31	273	遺物包含層	土師器	製塩土器	—	—	(6.4)	やや密	やや良	明赤褐色 橙色	ハケ痕ナデ、布目痕 ハケ痕ナデ、面オサエ	六連式
36	31	274	遺物包含層	土師器	製塩土器	—	—	(6.7)	やや密	やや良	明赤褐色 明赤褐色	ハケ痕ナデ、布目痕 ハケ痕ナデ、面オサエ	六連式
36	31	275	遺物包含層	土師器	製塩土器	—	—	(2.5)	粗	不良	橙色 橙色	布目痕 調整不明	六連式
36	31	276	遺物包含層	土師器	製塩土器	—	—	(4.5)	やや粗	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	布目痕 ナデ	六連式 粘土に1～2mm程度の長石・くさり礫粒を含む
36	31	277	遺物包含層	須恵器	杯	—	—	(4.1)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	
36	31	278	遺物包含層	須恵器	杯蓋	(13.4)	天井部径 (8.4)	(2.4)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、天井部ケズリ後ナデ	つまみ部欠損
36	31	279	遺物包含層	須恵器	杯蓋	(19.4)	天井部径 (10.4)	(2.7)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ、天井部ケズリ後ナデ	つまみ部欠損
36	32	280	遺物包含層	須恵器	甕	(21.2)	—	(4.1)	やや密	良	灰色 灰色	ナデ ナデ	
36	32	281	遺物包含層	須恵器	甕	—	—	(6.8)	やや密	やや良	灰白色 灰白色	ナデ、同心円状当て具痕 平行タタキ、ナデ	
36	32	282	遺物包含層	須恵器	壺	—	(15.6)	(2.6)	密	良	灰色 灰色	回転ナデ 回転ナデ	脚部ナデ
36	32	283	遺物包含層	須恵器	杯	—	(8.2)	(2.1)	やや密	良	白灰色 白灰色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ヘラ切り
36		284	遺物包含層	須恵器	杯	—	—	(1.9)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、ナデ	底部回転ヘラ切り後ナデ 貼付高台
36	32	285	遺物包含層	土製品	土錘	長さ (2.7)	径1.9	孔径0.32	やや粗	不良	橙色	指頭による形成	管状 両端を欠損
36	32	286	遺物包含層	土製品	円筒状土製品	—	(13.6)	(5.9)	やや密	やや良	橙色 明黄褐色	ケズリ後ナデ ハケ痕ナデ	内面被熱 粘土に1～2mm程度の長石粒・くさり礫粒を含む No.287と同一個体か
36	32	287	遺物包含層	土製品	円筒状土製品	—	(13.6)	(3.6)	やや密	やや良	橙色 明黄褐色	ケズリ後ナデ ハケ痕ナデ	内面被熱 No.286と同一個体か
37	32	288	遺構検出	須恵器	杯蓋	—	つまみ部 径3.6	(2.3)	やや密	良	灰色 灰色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ後一方ケズリ、ナデ	つまみ部貼付
37		289	遺構検出	須恵器	杯蓋	(16.6)	天井部径 (16.3)	1.9	やや密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
37	32	290	表面採集	須恵器	杯	—	(8.3)	(3.6)	やや密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ、ナデ	貼付高台
37	33	291	遺構検出	須恵器	壺	(18.4)	—	(3.2)	密	良	褐灰色 褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	内面に刻印を有す
37	32	292	遺構検出	須恵器	壺	(31.8)	—	(4.6)	やや密	良	黄灰色 黄灰色	回転ナデ 回転ナデ	粘土に長石粒を含む
37	33	293	表面採集	須恵器	壺	—	—	(4.6)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	胴部に2条、肩部・胴部境に2～3条の沈線 肩部に格子目ヘラ描線
37	33	294	遺構検出	青磁	鉢	(14.4)	—	(2.3)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	鎬連弁
37	33	295	型荷役	青磁	鉢	—	—	(2.6)	密	良	胎土：灰色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	内面3条の沈線
37	33	296	遺構検出	青磁	鉢	—	5.25	(2.4)	密	良	胎土：灰白色 釉：オリーブ灰色	回転ナデ 回転ナデ	同安窯系鉢 内外面に櫛描文 畳高台、コタツ状底
37	33	297	遺構検出	青磁	鉢	—	—	(3.8)	密	良	胎土：灰色 釉：灰オリーブ色	回転ナデ 回転ナデ	同安窯1類 内面に劃花文、外面に櫛描文
37	33	298	表土除去	白磁	鉢	—	—	(4.2)	密	良	胎土：灰白色 釉：灰白色	回転ナデ 回転ナデ	玉縁口縁
37	34	299	表面採集	瓦質土器	甕	(36.6)	—	(6.3)	やや密	良	灰黄色 灰黄色	ヨコナデ、同心円状当て具痕 ヨコナデ、格子目タタキ	
37	34	300	遺構検出	瓦質土器	鍋	—	—	(8.5)	やや密	良	灰白色 灰色	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、指オサエ、ナデ、ハケ目	外面に煤付着
37	33	301	遺構検出	瓦質土器	足鍋（脚）	—	—	(7.3)	やや密	良	灰白色、明灰色	指頭による形成	脚部 粘土に長石・不透蛇を含む
37	33	302	遺構検出	瓦質土器	足鍋（脚）	—	—	(5.75)	やや密	良	にぶい黄橙色	指頭による形成	脚部 粘土に不透蛇を含む
37	33	303	表土除去	瓦質土器	足鍋（脚）	—	—	(6.3)	やや密	良	灰白色	指頭による形成	

検区	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm) 口径(復元径)	底径(復元径)	器高(残存値)	胎土	焼成	色調(内/外)	主な調整(内/外)	備考
37	34	304	遺構検出	土師器	把手付甕(把手)	—	—	(3.7)	やや粗	不良	浅黄橙色	指頭による形成	胎土に長石・石英を含む
37	33	305	遺構検出	土師器	土鍋	最小(4.3)	復2.0	孔径0.4	やや密	やや良	にぶい橙色	指頭による形成	鉄錆形跡 胎土に長石・石英粒を含む

第３表　出土石製品観察一覧表

検区	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)(残存値) 最大(残存値)	幅(残存値)	厚さ	重量	石材	備考
22	15	14	ST 2	石製品	石鍋	口径—	底径—	(4.5)	61.9	滑石	
28	20	118	SP201	石製品	石鍋	(1.6)	1.2	0.3	0.2	黒曜石	剥離痕
28	20	119	SP1317	石製品	剥片	(3.4)	(4.6)	0.8	14.0	頁岩片岩	両面二次加工
28	20	120	SP1101	石製品	石鍋	口径—	底径(16.0)	器高(4.9)	66.5	滑石	
28	20	121	SP228	石製品	砥石	(6.65)	5.5	7.3	350.0	頁岩	仕上げ砥 4面使用 欠損後二次使用
28	20	122	SP656	石製品	砥石	(6.3)	4.3	2.1	102.6	流紋岩質凝灰岩	平砥 4面使用
32	26	223	SK48	石製品	石鍋	2.25	1.4	0.35	1.0	黒曜石	剥離痕
33	27	234	SB13	石製品	打製石斧	(6.9)	(6.5)	1.4	86.5	頁岩片岩	
33	27	235	SB13	石製品	打製石斧	(8.4)	5.4	1.1	66.2	塩基性片岩	
35	30	257	SX 3	石製品	石鍋か	5.4	5.6	0.8	35.1	塩基性片岩	
35	30	259	SX 5	石製品	砥石	(16.6)	7.2	6.3	1063.0	砂岩	平砥 かえり出し痕有 3面使用
35	30	260	SX 5	石製品	打製石斧	(12.2)	6.6	1.7	215.0	塩基性片岩	
35	30	261	SX 6	石製品	打製石斧	(11.1)	8.5	1.7	189.0	塩基性片岩	
35	30	262	SX 6	石製品	打製石斧	9.4	4.25	0.9	63.1	塩基性片岩	剥離剥落
35	30	263	SX 6	石製品	打製石斧	(12.4)	8.6	1.9	273.0	塩基性片岩	未製品
35	30	264	SX 7	石製品	打製石斧	(13.3)	7.1	1.4	170.0	塩基性片岩	
37	34	307	遺構検出	石製品	錘石	(11.3)	(11.2)	4.2	700.0	流紋岩質凝灰岩	
37	34	308	表土除去	石製品	打製石斧	(7.6)	(4.7)	1.1	50.5	塩基性片岩	未製品
37	34	309	遺構検出	石製品	打製石斧	(7.15)	6.65	1.6	97.0	塩基性片岩	
37	34	310	遺構検出	石製品	打製石斧	16.0	4.4	0.65	31.2	塩基性片岩	未製品
37	34	311	表土除去	石製品	打製石斧	10.3	4.6	1.8	110.1	塩基性片岩	未製品

第４表　出土鉄器・金属製品観察一覧表

検区	区画	No.	出土場所	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
28	20	123	SP273	鉄製品	刀子	刃部(残存)6.3 刃部幅2.0 茎部長4.4	24.2	刀子二次加工・鋸に転用か 錆化が著しい。
34	28	237	ST 1	銅製品	銅鏡	径9.75 厚0.5 縁高0.7 縁径1.5	54.9	明高貴更換
34	28	242	ST 2	鉄製品	鉄鏃	(長11.7) (幅5.1)	70.1	短頸鏃又式・長頸鏃又式の2個体分付着
34	28	246	ST 2	鉄製品	小刀	刃部(残存)25.3 刃部幅3.0 茎部長7.7 厚0.7	168.3	鞘部 切先部分をわずかに欠損 目釘穴跡を有す 錆化が著しく鞘部に滑を有す
34	28	248	ST 3	鉄製品	小刀	刀身部長24.0 刃部幅2.6 茎部長11.5 厚0.65	307.6	鞘部 木鞘痕有 目釘穴跡を有す 錆化が著しい。
37	34	306	表土除去	金属製品	耳環	外方径　長3.16×短2.71 内法径　長1.54×短1.29 断面径　長0.84×短0.54 突合部幅0.15	17.7	銅芯金銅張?

Ⅳ　中恋寺遺跡発掘調査に係る自然科学分析業務

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中恋路遺跡の発掘調査では、古墳時代～室町時代の集落が発見され、竪穴建物や墓、多数の柱穴などが確認されている。今回の分析調査では、中恋路遺跡ⅣＤ地区で検出されたＳＴ２及びＳＴ４遺構の機能・用途、特に遺体埋納の可能性に関する情報を得ることを目的として、リン酸・カルシウム分析を実施する。また、ＳＫ 27遺構の構築年代を推定することを目的として、堆積物から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施する。

１　ＳＴ２・ＳＴ４遺構のリン酸・カルシウム分析

１－１　試料

分析試料は、ＳＴ２遺構埋土中・下層、ＳＴ４遺構埋土下層、比較試料として採取された各遺構近辺の基盤をなす堆積物(地山土)の合計５点である。試料の詳細は結果と合わせて第５表に示す。なお、ＳＴ２遺構埋土中・下層からは、鉄刀・青磁椀・土師器皿、ＳＴ４遺構埋土下層から土師器皿・杯が出土している。

１－２　分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法(土壌標準分析・測定法委員会，1986)に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

粉砕土試料 1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO_3)約 10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)約 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

１－３　結果

リン酸・カルシウム分析結果を第５表、第 38 図に示す。

・ＳＴ２遺構

リン酸含量は、埋土で 1.07～ 1.21mg/gと少なく、カルシウム含量も 3.54～ 3.94mg/gと少ない。周辺地山土と比較すると、遺構埋土下層(試料 No. ３)の各分析値がわずかに多い。

第５表　リン酸・カルシウム分析結果

試料名				土色		土性	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
試料No.	地区	遺構名	採取位置・層位					
1	Ⅳ D	ST2周辺	遺構周辺地山土	10YR5/3	にぶい黄褐色	LiC	1.07	3.88
2	Ⅳ D	ST2	遺構内埋土中層	10YR3/4	暗褐色	LiC	1.07	3.54
3	Ⅳ D	ST2	遺構内埋土下層	10YR3/4	暗褐色	LiC	1.21	3.94
4	Ⅳ D	ST4周辺	遺構周辺地山土	10YR6/4	にぶい黄橙色	LiC	1.03	3.75
5	Ⅳ D	ST4	遺構内埋土下層	10YR4/3	にぶい黄褐色	LiC	1.49	3.81

備考
(1) 土性：土壌調査ハンドブック改訂版（ペドロジー学会編，1997）の野外土性による。
LiC･･･軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）
(2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

第38図　リン酸・カルシウム分析結果

・ＳＴ４遺構

リン酸含量が、周辺土と比較すると、埋土下層（試料No. ５）で 1.49mg/gと多いが、カルシウム含量に大きな差はない。

１－４　考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量を把握することは有効である。

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある（Bowen, 1983;Bolt･Bruggenwert, 1980;川崎ほか，1991;天野ほか，1991）。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約 3.0mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5mg/g（川崎ほか，1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では 6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通１～ 50mg/g（藤貫，1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。

今回の調査では、リン酸の賦存量である 3.0mg/g、カルシウムの賦存量である 50mg/gを超える試料

はなく、いずれも範囲内で少ない値である。調査試料間の比較では、各遺構埋土下層において、リン酸含量がわずかに多い傾向を示す。カルシウム含量は、ＳＴ２遺構埋土下層でわずかに多い傾向を示すが、ＳＴ４遺構では有意な差が認められない。このように埋土下層ではリン酸が富化するような何らかの原因が生じている可能性があるが、動物遺体の存在を積極的に指示することはできない。今後、今回の調査で実施していない腐植含量を調査し、リン酸の由来について検証していく必要がある。

２　ＳＫ27遺構の放射性炭素年代測定

２－１　試料

ＳＫ27遺構から出土した炭化材１点(試料No.６)である。

２－２　分析方法

分析はＡＭＳ法で実施する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸―アルカリ―酸処理)。試料を燃焼させたあと、真空ラインで不純物(水など)を取り除き、CO_2を精製する。これを鉄で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。ＡＭＳ測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBYの半減期 5568年を使用する。また、測定年代は 1950年を基点とした年代(yBP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。

暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1(Copyright 1986-2013 M. Stuiver and P.J.Reimer)を使用し、１σ(67%の確率)と２σ(95%の確率)の両方を示す。暦年較正とは、大気中の ^{14}C濃度が一定で半減期が 5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}Cの半減期 5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正曲線は Intcal13を使用する。なお、国際的な取り決めによって、年代値は測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが、将来的に暦年較正曲線並びに計算法が変更された場合の再検討をする際に必要なため、あえて丸めない(１年単位)値で記す。

２－３　結果

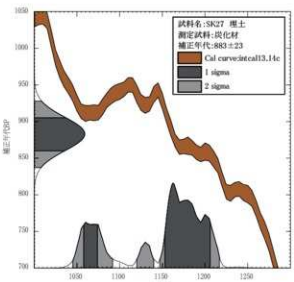
結果を第６表、暦年較正結果を第39図に示す。同定体補正を行った年代値は、880±20yBPである。暦年較正値は１σ確率１位の値がcal AD 1154～1207、２σ確率１位の値がcal AD 1147-1218を示す。

ＳＫ 27出土炭化材の年代値は、12世紀後半から 13世紀初頭の年代を示している。ただ、炭化材の場合、残存部位が最外年輪部分に相当するとは限らないため、実際に利用された年代値は得られた年代値より多少年代差が生じていることを考慮しておく必要がある。

第６表　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料・遺構名（種類）	処理方法	測定年代yBP		δ ^{13}C (‰)	暦年較正結果					Code No.
		δ ^{13}C 補正あり	δ ^{13}C 補正なし		誤差	cal BC	cal BP	相対比		
試料No.６ ⅣＤ区 ＳＫ27埋土 （炭化材）	AAA	880±20 (883±23)	880±20	−24.86±0.38	σ	cal AD 1058 − cal AD 1075	cal BP 892 − 875	0.158		IAAA-142240
						cal AD 1154 − cal AD 1207	cal BP 796 − 743	0.842		
					2σ	cal AD 1046 − cal AD 1093	cal BP 904 − 857	0.263		
						cal AD 1120 − cal AD 1140	cal BP 830 − 810	0.068		
						cal AD 1147 − cal AD 1218	cal BP 803 − 732	0.669		

1)処理方法のAAAは，酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。
2)年代値の算出には，LIBBYの半減期5568年を使用した。
3)yBP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)暦年の計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1(Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer) を使用し，補正測定年代に()内に示した一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は，1桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%，2σは95.4%である。相対比は，σ，2σのそれぞれを1とした場合，確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第39図　暦年較正結果

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信，1991，中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，p.28-36.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M,1980,土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，学会出版センター，309p.

Bowen,H.J.M.，1983,環境無機化学−元素の循環と生化学−．浅見輝男・茅野充男訳，博友社，297p.

土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法．博友社，354p.

藤貫　正，1979,カルシウム．地質調査所化学分析法，52,p.57-61.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久，，1991,九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省　農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，p.23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修，1967,新版標準土色帖．

ペドロジー学会編，1997,土壌調査ハンドブック改訂版．博友社，169p.

Ⅴ　総括

今回実施した発掘調査では、主に古代から中世にかけての遺構・遺物が確認された。以下、2011年度（平成23年度）に実施した第１次調査ならびに2013年度（平成25年度）に実施した第２次調査の成果を踏まえつつ、本遺跡における特徴的な遺構や遺物について述べ、調査成果のまとめとしたい。

集落の変遷

３か年の調査で検出された主な遺構は第７表のとおりであり、当遺跡では弥生時代から室町時代にかけて、人々が断続的に生活していたことがうかがえる。また、集落の隆盛期は出土遺物から８世紀代と12世紀末～ 14世紀前半の２期であったと考えられる。特に中央部遺構密集区の柱穴群は、鎌倉時代において掘立柱建物が少しずつ場所を移動しながら何回も建て替えられたことを示している。出土遺物からも、鎌倉時代には多くの人々が居を構えていたと考えられ、この地域一帯が中世前半、有力者層の居住区域となっていた可能性がある。これは鎌倉時代の初め、東大寺再興に尽力した重源の技術顧問である宋人陳和卿が宮野荘を東大寺に寄進した時期に重なるため、この地の住人は東大寺とも何らかの関係があった可能性がある。今後の調査で東大寺との繋がりを示す遺構や遺物の検出を期待したい。

次に、土地利用について考察したい。今年度の調査で復元した古代及び中世の掘立柱建物は、主軸方位がほぼ同方向か、それらに対して直交する建物が大部分を占める。第１次・２次調査の成果と比較しても同様のことが言える。このことは、古代の地割りが中世においても踏襲されたことを意味する。さらには、現在の田畑及び家屋の向きもほぼ同じであるため、古代から続く地割りが現代まで影響を及ぼしていると言えよう。

第７表　中恋路遺跡検出主要遺構数一覧表

時代	第１次調査(2011年度)			第２次調査(2013年度)			第３次調査(2014年度)		
	SI	SB	ST	SI	SB	ST	SI	SB	ST
弥生時代	1								
古墳時代				1			1		
古　　代					2		1	5	
中　　世		26	1		7		1	31	4

中世の竪穴建物

今回の調査において、中央部遺構密集区で検出されたＳＩ２は、出土遺物から15 ～ 16世紀の建物と考えられる。山口県内における中世の竪穴建物の検出は、これまで山口市阿東徳佐下の鍋倉遺跡、防府市下右田の下右田遺跡の２例が報告されているのみである。ここではこの２例と対比させながら、ＳＩ２について考えてみたい。下右田遺跡で検出された竪穴建物は、一辺が約3.1mの隅丸方形を呈し、壁際に浅い周溝が巡る。土師器、瓦質土器とともに鉄滓が出土しており、室町時代後半期の工房跡とされる。また、鍋倉遺跡で検出された竪穴建物は、一辺が約３mの隅丸方形を呈し、床面柱穴間に溝が巡る。出土土器から室町時代前半期の建物と考えられ、多量の炭が出土したことから工房であった可能性が指摘されている。一方、今回の調査で検出された竪穴建物ＳＩ２は、一辺が約３m前後の隅丸方形を呈する。南側辺縁から東側辺縁にかけて周溝が巡り、形状と規模は前述の２例とほぼ同じである。反面、土師器、青磁、白磁、瓦質土器等が出土したが、炭や鉄滓、焼土塊など当該建物が工房

であったことを示唆する出土遺物は皆無であった。また、壁や床面に被熱痕も確認されなかった。しかし、室町時代後半期に掘立柱建物ではなく、竪穴建物を設けていることから、室内床上ではなく土間で作業する必要性を伴う工房等の施設であったと考えるのが自然であろう。

銅鏡が出土した墓

今回の調査において、調査区南西端の土坑墓ＳＴ１から土師器杯とともに銅鏡（237）が出土した。ＳＴ１は後世の開発のために南西側半分が削平されており、当初は他の副葬品が埋納されていた可能性もある。木製容器に納められた銅鏡は、床面に対して斜めに傾いた状態で出土していることから、被葬者の身体上に置かれた状態で副葬され、後に崩れ落ちたものと考えられる。山口県内の遺跡において、古代・中世の土坑墓または木棺墓から鏡が出土した例は第８表のとおりであるが、県央部並びに西部に集中しており、北部並びに東部における出土例は現在のところ見られない。

第8表　山口県内遺跡の鏡が出土した古代・中世の主な土坑墓、木棺墓

No.	出土遺跡	所在地	墳種	法量（cm）	共伴遺物	時期	重量（g）	備考
1	赤迫遺跡	山口市阿知須赤迫	墓壙双鳥墳	径9.4×厚0.1 脚径0.9×脚高0.3	土製容器1 和鏡	平安時代後期	61.6	曲物は檜材、縦方向に巻き作る
2	周防国府跡	防府市国衙	八稜墳	径8.5×厚1.5 縁高0.6 脚高0.3	土師器杯付(椀)1、緑釉陶器椀1 鉄	平安時代後期	-	銅鏡一面に植物繊維付着 告にくるまれて副葬されたか 開拓者
3	鋳銭司大歳遺跡	山口市鋳銭司大内	敷葉双重墳	径10.9　縁高6.7 脚径1.6×脚高0.3	白磁椀底部2、鉄刀1	平安時代末期	168	銅鏡に布の痕跡　受形 内稜式中縁、乳型円鈕鈕
4			梅鉢双鳥墳	径10.3　縁高0.5 脚径0.6×脚高0.3	青磁椀1、青磁皿1、銅鈴2、 土師器皿4、鉄刀1、鋼鏡1	鎌倉時代中頃～後半	24.2	鈕に絹織物　指紋痕 多稜式鏡縁と鋸歯状縁
5	高野遺跡	下関市豊浦町高野	銅甲墳	最大径12.3	青白磁小子の蓋、土師器椀1 白磁椀1、土師器皿1、木製容器1	平安～鎌倉時代	105.7	八花形の葉文様 鈕「銅州其石家造二仏師子」 大稜線　鋸歯状縁部　指紋痕跡
6	中北遺跡群	山口市宮野下中北跡	四点双重墳	径9.75　縁高6.7 厚0.5　脚径1.5	土師器杯1、木製容器1	鎌倉時代	54.9	銅鏡は下甲に群き込まれる
7	坂ノ上遺跡	下関市菊川町上岡坂	不明	径6.3　縁高0.3 縁幅0.25 脚高1.7×幅0.3	－	中世末～近世初期	28.0	布紙付着 鈕に絹織物 指紋痕

おわりに

３か年の調査により、宮野盆地の椹野川左岸地域、特に椹野川とその支流である古甲川に挟まれた地域において、弥生時代から室町時代にかけての人々の生活を知るための貴重な資料を得ることができた。一方、縄文時代以前の遺構は確認できなかったが、遺物については平成25年度調査で縄文土器深鉢片１点、今年度調査で縄文土器浅鉢片１点と打製石斧11点を検出している。縄文時代に、当該地域周辺に狩猟採集の場があり、近辺に集落が形成されていた可能性がある。宮野盆地における発掘調査については、これまで椹野川右岸地域が中心であり、左岸地域を対象とした長期に渡る本格的な発掘調査は、山口市による短期間の調査を除いては今回が初めてである。今後、新たな発掘調査によって、当該地域の歴史がさらに解明されることを期待したい。

参考文献

山口県編 2004『山口県史」資料編　考古2　山口県編 2012『山口県史」通史編　中世

山口県教育委員会編 1978『下右田遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第43集

山口県教育委員会・山口県埋蔵文化財センター編 1984『上辻・鋳銭司大歳・今宿西遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第75集

山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター編 1987『陶ノ上遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第101集

山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター編 1988『鍋倉遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第111集

山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター編 1999『高野遺跡（北地区）』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第9集

山口県埋蔵文化財センター 2000『赤迫遺跡（C 地区）』山口県埋蔵文化財センター調査報告第19集・阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告第17集　山口市教育委員会 2002『山口市文化財年報1』

山口市教育委員会編 2004『山口市文化財年報3』　防府市教育委員会編 1975『周防国衙―南限地域―の調査』

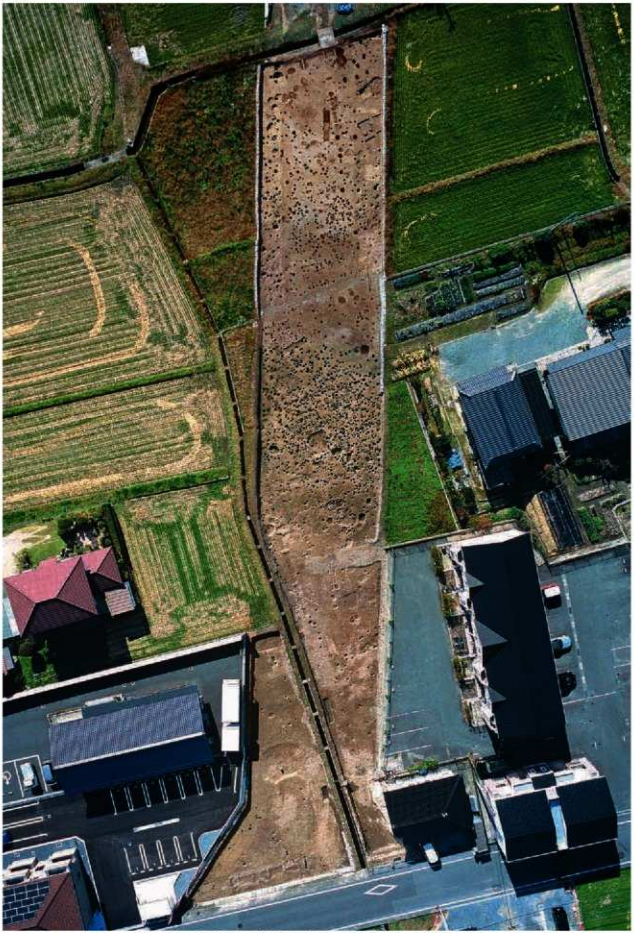
防府市教育委員会・周防国府跡調査会編 2002『下右田遺跡第20次発掘調査報告』防府市埋蔵文化財調査報告0212

防府市教育委員会編 2013『周防国府跡発掘調査報告3』

図　版

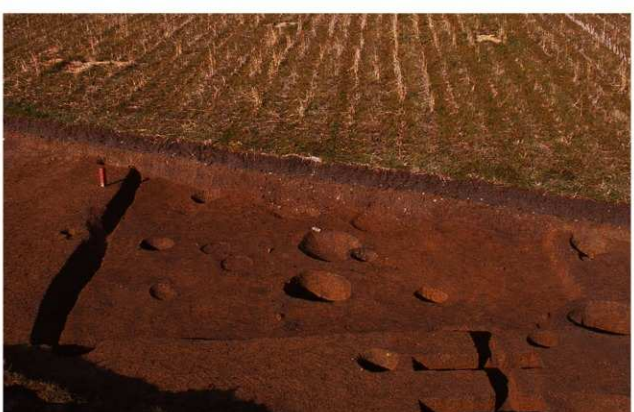
調査区遠景（北東から）

図版 2



調査区全景（平成 25・26 年度調査範囲合成写真）

調査区近景（平成 26 年度調査範囲　南西から）



SI1 完掘状況（東から）

図版 4

SI2 完掘状況（南から）

SI3・SK79・SK95・SK96・SK99・SX8 完掘状況（南東から）

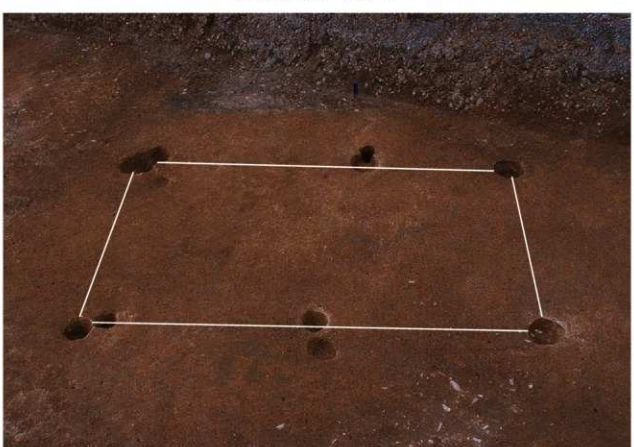
掘立柱建物群①(平成 25・26 年度調査範囲合成写真)

図版 6

SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB19
SB20
SB21
SB22
SB23
SB24
SB25
SB26
SB27
SB28
SB29
SB30
SB31
SB32
SB33
SA1

掘立柱建物群②

SB35 完掘状況（東から）



SB36 完掘状況（東から）

図版 8

SP547(SB18) 遺物出土状況（北から）

SP551(SB19) 遺物出土状況（南から）

SP144 遺物出土状況（東から）

SP174 遺物出土状況（東から）

SP202 遺物出土状況（南から）

SP426 遺物出土状況（北から）

SP684 遺物出土状況（北から）

SP984 遺物出土状況（南から）

SP1108 遺物出土状況（南から）

SP1110 遺物出土状況（北から）

SP1261 遺物出土状況（南から）

SP1310 遺物出土状況（南から）

SP1314 遺物出土状況（南から）

SK4 土層断面（南東から）

SK8 遺物出土状況（南東から）

SK12 遺物出土状況（南から）

図版 10

SK23 遺物出土状況（東から）

SK36 遺物出土状況（北東から）

SK41 遺物出土状況（東から）

SK27 遺物出土状況（北から）

SK46 土層断面（東から）

SK61 土層断面（西から）

SK101 土層断面（西から）

図版 12

SK101 完掘状況（北から）

SD1 完掘状況（北東から）

SD13 完掘状況（南東から）

ST1 遺物出土状況（南東から）

ST2 遺物出土状況（南から）

図版 14

ST3 遺物出土状況（東から）

ST4 遺物出土状況（東から）

出土遺物（1）

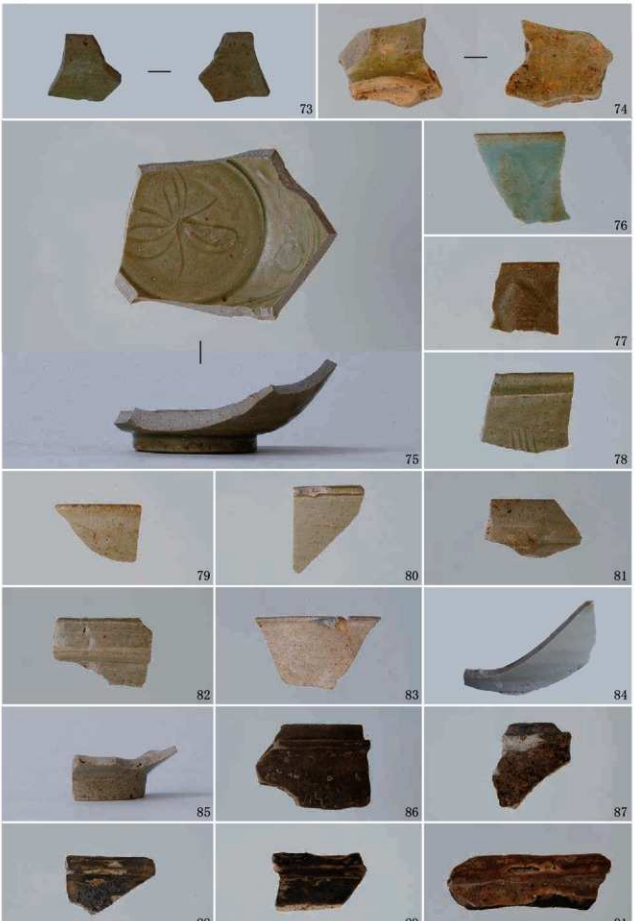
図版 16

出土遺物（2）

42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
71
53
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
72

出土遺物（3）

図版 18



出土遺物（4）

出土遺物（5）

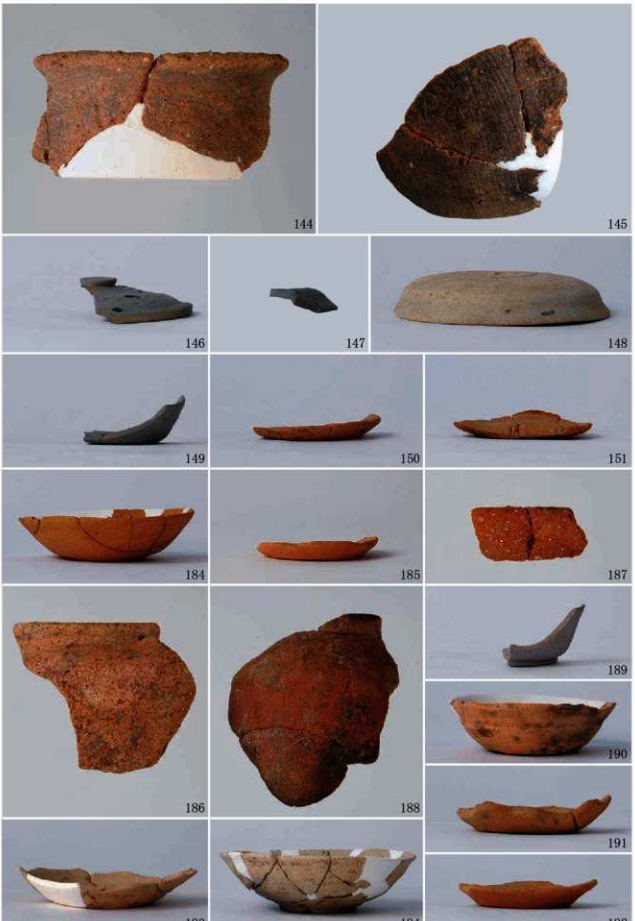
図版 20

103
105
106
107
104
108
109
119
111
112
114
115
116
117
118
123
119
120
121
122
124

出土遺物（6）

出土遺物（7）

図版 22


144
145
146
147
148
149
150
151
184
185
187
186
188
189
190
191
193
194
192

出土遺物（8）

152
153
154
155
156
157
158
159
160
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172

出土遺物（9）

図版 24

出土遺物（10）

出土遺物（11）

図版 26

211

212

213

214

215

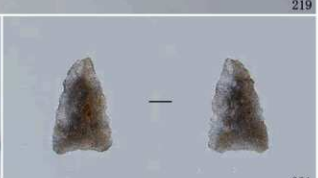
216

217

218

219

220


221

出土遺物（12）

出土遺物（13）

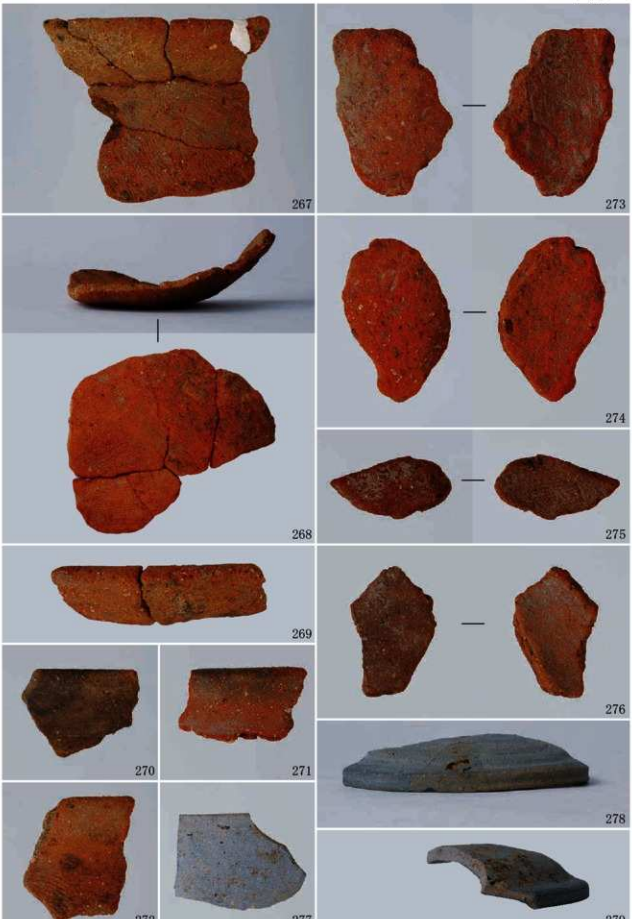
図版 28

出土遺物（14）

出土遺物（15）

図版 30

出土遺物（16）



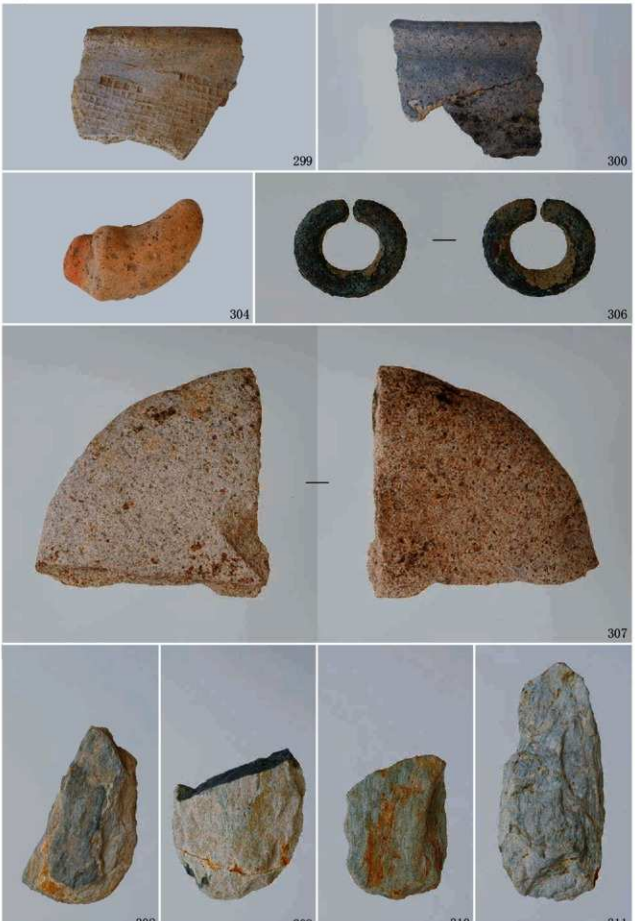
出土遺物（17）

図版 32

出土遺物（18）

出土遺物（19）

図版 34



出土遺物（20）

報告書抄録

ふりがな	なかこいじいせき３
書名	中恋路遺跡３
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第91集
編集著者名	高木英明　井上広之　河村美沙
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町３番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2015年３月26日（平成27年３月26日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかこいじいせき 中恋路遺跡	やまぐちけん 山口県 やまぐちし 山口市 みやのした 宮野下	352039		34°11′20″	131°30′11″	20140516 ～ 20141203	1,910㎡	県道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中恋路遺跡	集落	古墳時代 ～ 室町時代	竪穴建物　３棟 掘立柱建物　36棟 柵　１列 柱穴　約2900個 土坑　104基 溝　13条 墓　４基 性格不明遺構　11基	縄文土器 須恵器 土師器 瓦質土器 緑釉陶器 輸入磁器 土製品 石器・石製品 銅鏡 鉄器 銭貨　等	中世墓から土師器杯・銅鏡が出土。また別の中世墓から土師器皿・青磁椀・鉄刀・鉄鏃が共伴出土。

要約	中恋路遺跡は、低丘陵に囲まれた標高約40～45ｍの谷底平野に所在する集落遺跡である。今回の調査地はその中央部に位置し、古墳時代、古代、中世の竪穴建物が各々１棟、古代から中世にかけての掘立柱建物、柱穴、土坑、溝、墓等が多数検出された。特に調査区南西部には奈良時代後半から平安時代にかけての遺構、中央部には鎌倉時代から室町時代前半にかけての遺構が密集しており、居住地をわずかに移動しつつ継続的に生活が営まれていたことがわかる。また、製塩土器や緑釉陶器等の出土は、幅広い流通及び官衙的な役割をもった施設の存在を感じさせるものである。中世においては埋葬施設の副葬品から、被葬者が地域の有力者であったことがうかがえる。

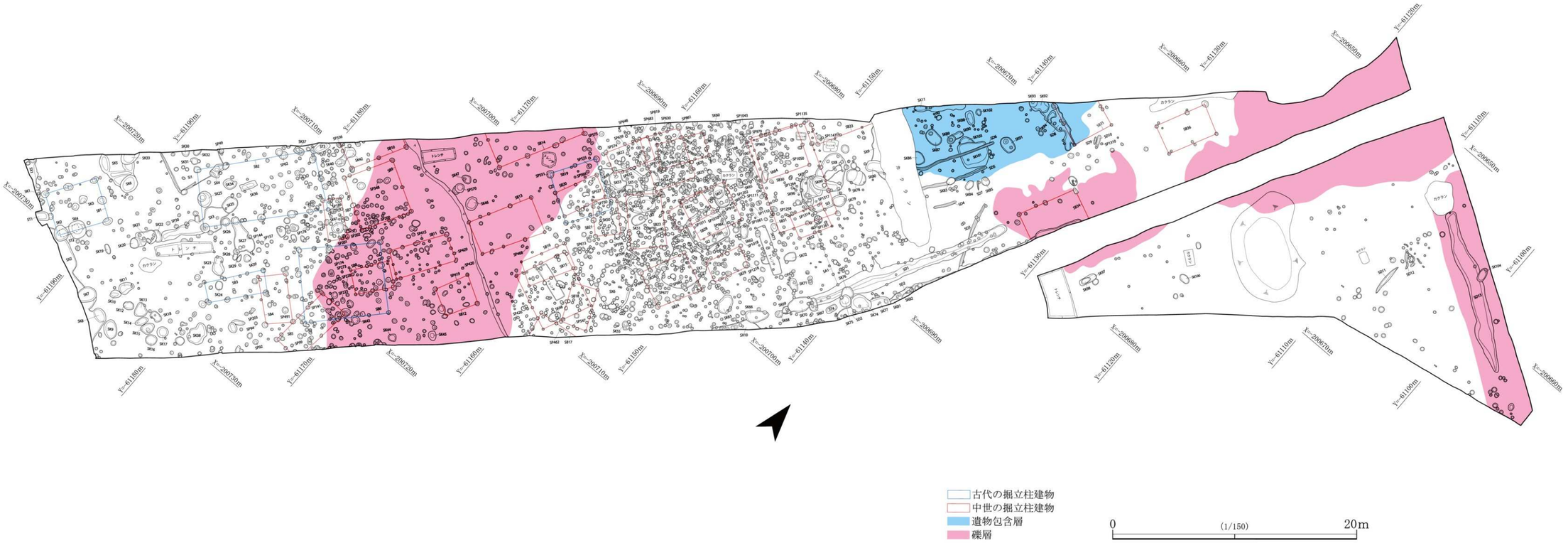
山口県埋蔵文化財センター調査報告　第91集

中恋路遺跡３

2015年3月26日

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号

印　　刷　アロー印刷株式会社
〒751-0818　山口県下関市卸新町10-3



中恋路遺跡Ⅳ地区遺構配置図